

熊本県文化財調査報告 第84集

# 新南部・潤野遺跡

—国道3号熊本北バイパス及び松橋バイパスに伴う  
埋蔵文化財発掘報告—

1 9 8 6

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第84集

# 新南部・潤野遺跡

—国道3号熊本北バイパス及び松橋バイパスに伴う  
埋蔵文化財発掘報告—

1 9 8 6

熊本県教育委員会



新南部住居跡群



ウバの塚全景

## 序 文

熊本県教育委員会では、建設省が施工する一般国道3号熊本北バイパス及び松橋バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。熊本北バイパスにおいては新南部遺跡（上西原）を発掘し奈良～平安時代のかまどつき竪穴住居群とそれに伴う遺物が発見されました。また、松橋バイパスにおいては、安徳天皇陵参考地（晚免古墳）を含む潤野古墳群の一つ、二ツ枝古墳の発掘調査を実施しました。この古墳は安徳天皇のウバの塚といわれていましたが、発掘の結果、古墳とは認められず中世の円形周溝造構が検出され、墳墓、または供養墓と考えられます。

いずれも文献資料が少なく調査によって新例を加えることができました。

発掘調査の実施にあたりましては、九州地方建設局熊本工事事務所の御理解と御協力をはじめとして、地元の方々からも御協力を賜りました。ここにお礼を申しあげます。

また、本書が埋蔵文化財に対する認識と理解さらに学術上、研究上の一助となれば幸いです。

昭和61年3月31日

熊本県教育長 伴 正 善

## 例　　言

- 1 この報告書は、一般国道3号熊本北バイパス及び松橋バイパスの建設に伴って事前調査を実施した、熊本市新南部遺跡、宇土市潤野古墳群の報告である。
- 2 発掘調査は、建設省の依頼を受け県教育委員会が実施した。
- 3 現地での調査は、県文化課参考平岡勝昭が担当し、文化課嘱託河北一毅、坂井美佐、臨時職員安達武敏が随時協力した。
- 4 この報告書の作成は平岡があたり、整理には熊本県文化財収蔵庫の皆さんとの協力を得た。
- 5 この報告書の執筆編集は平岡が行なった。

## 1. 総 目 次

1. 調査の経過 .....	1
2. 遺跡の位置と環境 .....	2
3. 新南部遺跡 .....	9
4. 潤野遺跡 .....	47

## 1. 調査の経過

国道3号線における交通緩和と市街地への交通公害の回避のため、建設省九州地方建設局は松橋バイパス及び熊本北バイパスの建設に着手した。昭和60年度熊本県教育委員会は建設予定地内の埋蔵文化財の事前調査を、建設省の委託を受けて実施した。

北バイパスにおいては、熊本市新南部遺跡の一部が工事にかかり、ここでは新南部遺跡の範囲が広いので字名を取って「上西原遺跡」として報告する。調査の期間は5月から9月末まで現地調査を実施した。

また、松橋バイパスにおいては、宇土市立岡に所在する潤野古墳群が道路予定地内にはいり、二ツ枝古墳（ウバの塚）とその周辺部の遺物の散布地を調査することにした。地上物件としての二ツ枝古墳は当初より発掘調査とし、周辺部は試掘調査とした。調査期間は10月から12月末日まで調査を実施した。

また北バイパスの竜田陣内遺跡については用地買収の終った地点について、2月末から3月末日まで調査を実施した。

### 調査の組織

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 森 一則（文化課長）

〃 総括 隈 昭志（主幹兼文化財調査係長）

調査員 平岡 勝昭（参事）

〃 河北 肇（文化課嘱託）

〃 坂井 美佐（〃）

〃 安達 武敏（臨時職員）

調査事務局 紫田 和馬（主幹兼経理係長）

〃 森 貴史（参事）

〃 木下 英治（参事）

〃 谷 喜美子（主事）

なお、河北肇氏は調査担当になった4月13日に急逝、記して冥福をいのる。坂井美佐氏は6月結婚のために退職した。

## 2. 遺跡の位置と環境

### 遺跡の位置と環境

今回の調査地は熊本平野の北端を流れる白川の中流域と南端に流れる緑川の下流に位置する。現熊本平野は国鉄鹿児島本線と国道3号線が平行して走っている。海岸線からおよそ7kmのところを南北に走っている国鉄線から西側は古墳時代以降干陸化されたもので、権藤、刈草、白藤遺跡等は古墳時代の遺物を出土するがこれも鉄道よりわずかに西側に位置する。中世にはいり鎌倉時代になって川尻町に大慈禪寺が建立される。

天明町及び飽田町、宇土市走潟などに六地蔵や板碑などがあるが鎌倉時代まで逆のばれるものは見当らない。白川では薄場町、坪井川では高橋町、緑川では緑川橋上、加勢川では川尻の石塘、浜戸川は国町、潤野川は南田尻まで沙がのぼる。現在は河川改修がおこなわれており、海岸はコンクリートで護岸がなされている。

まず、新南部遺跡は白川が沖積平野をはなれ岩をけずり蛇行しはじめるとある。標高海拔32m前後で託麻原台地上に位置する。基盤は託麻原疊層で、黒色の火山灰層が大地全体をおおう。付近の遺跡について「熊本市東部地区文化財調査報告」および「西谷遺跡」を参照されたい。

潤野古墳群は宇土市の東端木原山(314m)の西麓に位置する。潤野川は松橋町海ノ平を発し、立岡池を流れ、南田尻から大曲の方へ流れる。付近の遺跡については次の通りである。宇土城の瓦の生産地花園町、近世陶磁器は鍋田皿山など若干の紹介を試みる。

### 摩崖千体仏

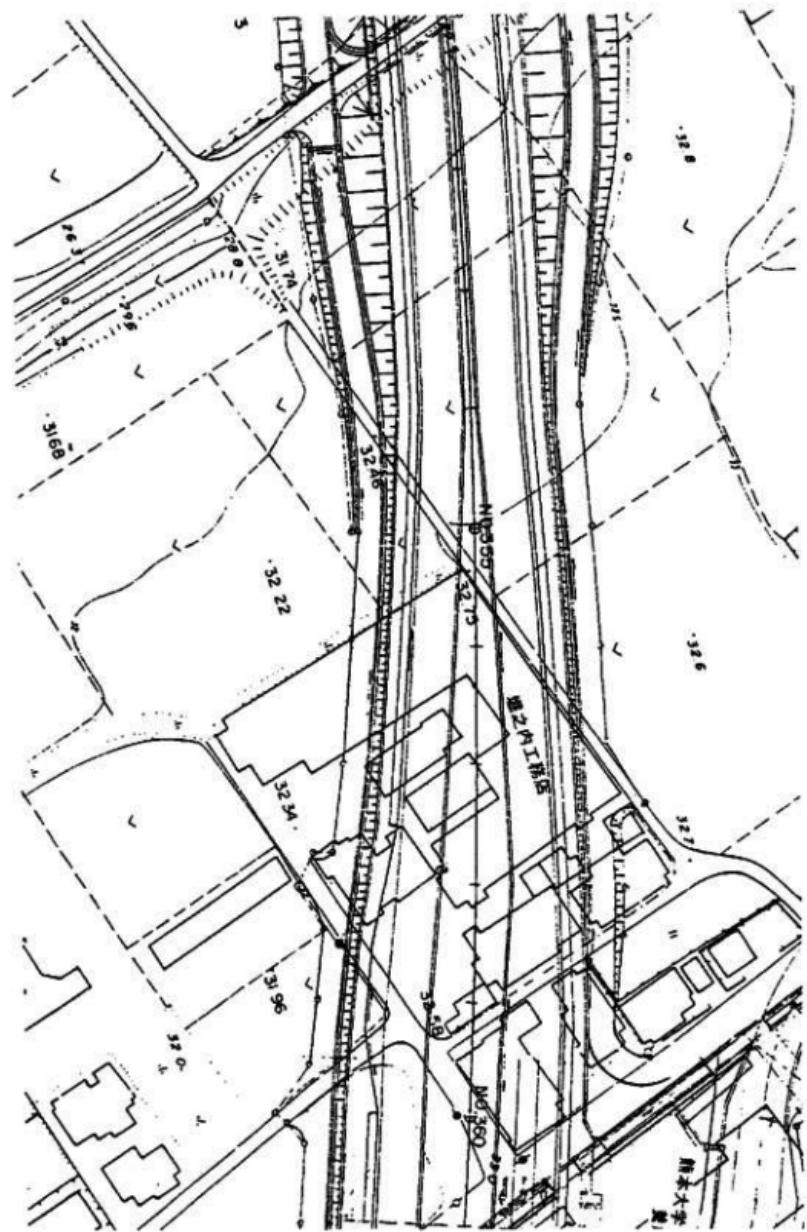
城塚町尾上、毘沙門堂下の崖面に一体が約20cmほどの地蔵菩薩を立像で並列に浮彫している。崖面に仏像を刻んだものを摩崖仏というが、このものはその数が多数あるところから、摩崖千体仏とよばれている。

時期的には付近にある海藏寺・嚴福寺などの中世庵寺と大差ないものと思われる。

### 走潟の六地蔵

地蔵菩薩は、釈迦が亡くなつて彌勒菩薩が現われるまで有情を教え救うとされる菩薩で、平安時代中期頃から信仰が始まったといわれている。その後地蔵尊は、阿弥陀・淨土信仰とともに庶民信仰の対象として盛んになった。

この地蔵尊を大道に配して六地蔵とし、寺院の境内・村の入口・街道筋などに建てられた。走潟町南上の県道脇にある六地蔵は、石幢形式の六地蔵であるが、現在龕部にあった地蔵尊と笠は失なわれ、中台の上に直接宝珠がのっている。もとは六地蔵の横を道が通っていたが、今



第1図 上西原遺跡調査区全体図

は道も変わり六地蔵は水田の中にある。

#### 宇土城跡（城山）

宇土城跡（城山）は、小西行長が天正17年（1589年）築城したもので、別名小西城・鶴の城ともいわれる。

本丸は東西49m、南北34.5mと小規模であるが、二の丸・三の丸などは比較的ひろく、城門を5箇所に置き、石垣を築き、空堀を巡らし、三層の天守閣は、数里離れたところからもその姿を望むことができたという。このような偉容を誇った宇土城も、関が原の戦の後、加藤清正の宇土城攻めで開城し、ついに慶長17年（1616年）幕命で廃城となった。

昭和53年の発掘調査で、400年近くもの長い間、眠りについていた石垣の一部が検出され、当時の権力者の偉大さを窺い知ることができた。

#### 網田焼

網田焼は寛政4年（1792年）肥前出身の山道喜右衛門を招き、細川家の御用窯として上網田町引の花に開窯されたもので、現在窯跡が県の史跡指定になっている。

この地に窯が設けられた要因に、網田山が藩の直轄領だったこと、交通の便に恵まれていたこと、燃料になる松材が豊富であったこと、それに有明海からの北風を利用することにより窯内の温度を上げることができるなどの好条件を備えていたことによる。

初期の網田焼は白淨で透明感をもった獨得の美しさが、作陶の造形美と相俟って、絶妙の美を構成している。しかし文政5年（1822年）藩の保護が解かれると次第に衰微し日常雑器の生産へと転じ、ついに大正初期には廃窯となった。

このように由緒ある網田焼も今ではわずかに現存する製品と、崩れ落ちた窯跡だけが当時の名残りをとどめているにすぎない。

#### 周辺の遺跡名（うとの文化財より抜すい）

##### No 遺 跡 名

- 34 名和行直の墓
- 35 宗福寺の六地蔵
- 36 宗福寺跡
- 45 宇土城跡（西岡台）
- 46 陳ノ前遺跡
- 47 馬場遺跡
- 49 追ノ上古墳
- 50 帆足通横の墓
- 51 片山中良の墓
- 52 神合古墳



第2図 洞野遺跡周辺図（うとの文化財より）

- 53 不知火諾右衛門の墓
- 54 栗崎の天神樟
- 55 猫ノ城古墳
- 56 城ノ越古墳
- 57 久保古墳
- 58 大平横穴群
- 59 法泉寺の六地蔵
- 60 宇土城跡（城山）
- 61 草野石瀬の墓
- 62 草野蒲川の墓
- 63 古城古墳
- 64 寿量寺の一字一石塔
- 65 武家屋敷の表門
- 66 温知館跡
- 67 横徳斎跡
- 68 天草四郎ゆかりの里
- 69 芭蕉塚
- 70 圓応寺の六地蔵
- 71 船場橋
- 72 石瀬遺跡
- 73 天神梅
- 74 築籠貝塚
- 75 走渦の六地蔵
- 76 如来寺
- 77 曾畑貝塚
- 78 橋崎古墳
- 79 立岡公園
- 80 安国寺跡
- 81 女夫塚（女塚）
- 82 三日鬼の窟古墳
- 83 三日大曾の宝塔残欠
- 84 三日の六地蔵
- 85 如来寺跡

- 86 立岡遺跡
- 87 晩免古墳
- 88 潤野古墳
- 89 西潤野古墳
- 90 神ノ山古墳群
- 91 古保里の六地蔵
- 92 古保里遺跡
- 93 境目遺跡
- 94 上松山箱式石棺
- 95 山内遺跡
- 96 チャン山古墳
- 97 南山内箱式石棺群
- 98 御手水古墳
- 99 向野田古墳
- 100 向野田石蓋土壙
- 101 桶底古墳
- 102 明治天皇御野立跡
- 103 烟中遺跡
- 104 下松山遺跡
- 105 松山手永会所跡
- 106 北園遺跡



# 新 南 部 遺 跡

(上西原遺跡)

## 目 次

第1章 調査の方法.....	13
第2章 遺構について.....	19
1節 住居跡について.....	19
2節 溝及び土壙について.....	29
第3章 遺物について	
1節 繩文、弥生時代の遺物.....	32
2節 奈良、平安時代の遺物.....	34
3節 その他の時代の遺物.....	40
第4章 まとめ.....	43

## [ 拝図目次 ]

- 1 上西原遺跡 全体図
- 2 清野遺跡周辺図
- 3 第1号住居跡
- 4 第2号住居跡
- 5 第3号、4号、5号、6号住居跡
- 6 第7号住居跡
- 7 第10号、12号住居跡
- 8 第9号、12号、13号、14号住居跡
- 9 C—13区縦柱建物
- 10 B—4区土壤及び道路状遺構
- 11 C—13溝状遺構
- 12 繩文、弥生時代の遺物
- 13 須恵器、土師器実測図
- 14 石器及び紡錘車実測図
- 15 鉄器類実測図
- 16 陶磁器実測図

## 〔図版目次〕

- 1 上 弥生墓壙状土壤 下 遺物出土状況
- 2 上 硬化面（上の住居内の道に続く）  
下 C 7区柱穴
- 3 住居状土壤
- 4 上 南西側より（第3号住居） 下 旧石器試掘トレンチ（E 7区）
- 5 上 旧石器試掘トレンチ（E 7区）  
下 E 8区柱穴
- 6 上 D 7区柱穴 下 E 9区柱穴
- 7 上 第9号住居跡遠構検出前 下 第9号住居と13号住居跡
- 8 上 第1—4号住居遠景 下 第1号住居跡
- 9 上 第5号住居跡内円形のたたき 下 かまど
- 10 上 第3号、第4号、第5号住居跡遠景 下 第6号住居跡の台石
- 11 上 紡錘車出土状況（6号住南側）
- 12 上 第6号住居跡 下 第7号住居
- 13 上 鉄鎌出土状況 下 鎌出土住居（第6号住居跡）
- 14 上 第7号住居 下 同住居内の柱穴
- 15 上 掘立柱遠景 下 掘立柱建物（左端中央 第8号住居跡）
- 16 上 第9号カマド砂岩状石を使用 下 第9号住居跡
- 17 上 第14号かまど（中央） 下 第15号、13号かまど
- 18 上 第14号かまど
- 19 上 第14号住居跡 下 第12号住居跡
- 20 上 第13号、14号、15号かまど遠構確認  
下 溝と總柱建物
- 21 上 總柱建物 下 C 13区柱穴
- 22 上 発掘風景 下 C 14区柱穴
- 23 上 第4号かまど 下 第5号かまど
- 24 D 12区付近（西側より）
- 25 上 C 13区柱穴 下 遠構確認作業
- 26 土壌内の石組
- 27 上 土壌内石組除去遠景 下 近景
- 28 上 土壌と總柱柱穴 下 土壌底の遺物

## 第1章 調査の方法

調査区内の道路予定地中央線の杭No352とNo360を直線で結び、No352を基点とし10m方眼を作成した。方眼は東からA B C……、北からアラビア数字1～15まで南の方にのばした。各交点をB 4 区、E 8 区と呼称した。

調査区の表土はユンボで刺ぎ、あとは手握りで調査をすすめた。一部押型文の出土する地区があったので、旧石器の検出もかねて託麻原疊層まで掘り下げた。旧石器については遺物や遺構を検出することはできなかった。

### 調査の日誌（抄）

昭和60年5月21日 晴

- プレハブの建込みをする。調査区域の標識（ビールテープ）をたてる。
- プレハブ周辺の整地及び除草

昭和60年5月22日 晴ときどき曇り

- バックフォー作業開始、東北側より。
- 作業荷物搬入。 ○電気工事済み

昭和60年5月23日 晴

- 遺構確認作業
- 栗石の集石 ○焼石のふかふか（かまどの破壊されたもの）。
- 農道側にトラロープを張る。

昭和60年5月27日 曇

- ダンプトラックによる運土
- 遺構確認作業

昭和60年5月29日 鮎りのち晴

- 表土 刺ぎ（ユンボ） ○電気メーター器取りつけ。 ○かまど2カ所、3間×3間の掘立柱、東側断面にもかまどを確認する。独立住居1棟。

昭和60年5月30日 晴

- 中央線の排土（排土量多く、運転手もてあましがみ） ○境界線の草刈り。カンネカズラの

蔓草、セイタカアワダチ草など。

昭和60年 5月31日

遺構確認作業。中央線より西側の表土除去。かまどつき竪穴住居4棟確認。

昭和60年 6月3日 晴

表土除去 清掃 P354—P355 西側かまどつき竪穴住居。

昭和60年 6月5日 晴

○遺構確認 P354西側。真夏日で気温30度をこす。

昭和60年 6月6日

○干燥しすぎて遺構確認作業困難。 ○柱穴状の落ち込みを浅く掘る。南側から写真撮影。

昭和60年 6月7日 くもりのち雨

○住居跡検出作業及び排土。

昭和60年 6月11日

中心杭打ち（測量業者）。隣接地畠地出土遺物を貰う。（村上さんより）。

昭和60年 6月14日 晴

○調査のための10m方眼を組む。P352地点付近より杭打ちを始める。 ○D5・D6区、E6、F6遺構確認。柱穴の浅掘り。

昭和60年 6月17日 晴

○P354付近の杭打ち。D3、D4、D5区付近の遺構確認。

昭和60年 6月20日

D11、D12、及び東北角B2区の壁を清掃。

昭和60年 6月24日 雨のち曇

E6、F6、G6区の排土。ブルドーザーが乗っていて土がかたい。E8から蛇紋岩の小さな磨製石斧が出土する。

昭和60年7月1日 曇りのち雨

写真撮影 (B3、B4、B5、C3、C4、C5、D4、D5区)。

表土剥ぎ及び線引き (B3、B4、B5、C3、C4、C5、D4、D5区)

昭和60年7月4日 曇り時々雨

○D11、D12排土する。焼土2ヶ所。

○レベル移動をする。遺跡内のB、Mを32,499mとする。

昭和60年7月5日

○清掃、ライン引き、写真撮影 (D6、D7、C6、C7区)。柱穴掘り。

昭和60年7月8日 雨のち晴れ

○C6、C7区柱穴掘り。

○溝状造構、磁片。B4区芋穴から 唐津焼土瓶出土。

昭和60年7月10日

○昨日の大雨のため土、水遺跡を洗う。下の道の路側帯くずれる。排土下の水田にまで達する。

○柱穴掘り (C6、C7、D6、D7区)、幅50cmの排水路ほり。

昭和60年7月12日 くもり時々雨

○土手削り

○全体の略図を作成する。トラックが通れるように野道つくり。

昭和60年7月16日 晴

写真撮影、柱穴ほり (C13、C14、C15区)

D3区実測。B13の土壤Iより土師器、須恵器出土。

昭和60年7月17日

○磨製石斧、石鎌出土 ○C10区住居掘り。

○清掃及び写真 (D10、D11、C10、C11)。

昭和60年7月18日 晴れのち雷雨

○造構確認 (D12区)。カベ清掃

- C10区住居跡の発掘——床がはっきりせずに、十字の土手を残して完掘

昭和60年7月19日 曇りのち晴

- B9区、B8区の土手をカットする。
- D9区の清掃。日中暑くて人夫さんたおれる。

昭和60年7月23日

- E9区、F9区の清掃遺構確認及び写真撮影。
- C13区溝掃り。溝の中に60~80cmの方形の落ちこみあり。連日暑く、雷鳴あり。

昭和60年7月25日 晴

- E9、E10区の柱穴ほり。○かまど1、2、3号ほりさげ。第6号柱床が出る。第1号住 ほぼおわる。○かまど1~17号までレベル読みをする。

昭和60年7月26日 晴

- B13土壤実測ほりさげ ○第2号住居の中に焼土2ヶ所がある。

昭和60年7月30日 晴

第6号住居 床面露出。かまど反対側から鉄鎌出土長さ13.46cm幅2.30cmおりまげ部分欠損。  
第7号住居写真取り後掘りさげ。C13区柱穴掘りさげ。第1号住居 平面実測。

昭和60年7月31日 晴

- 第1号住居、実測、☆C13区D13区遺物取り上げ。○鉄斧（鐵又はやりがんな）出土。

昭和60年8月1日 晴

- 第5、6、7号住居実測。第5号住居から塞ノ神式土器口辺部出土する。

昭和60年8月2日

E7、F7に2m×2mのトレンチ設定。ゴボウ穴掘りをする。

昭和60年8月5日

- 第3号、4号住居遺物取りあげ。E8、F8柱穴掘り。サヌカイト石片（K3-24）

昭和60年 8月 6日

- B 4、B 5、C 5 柱穴掘り及び除草
- 収蔵庫へ資料搬入する。第 8 号住居から高台付土師皿出土。
- 作業員の賃金支払

昭和60年 8月 8日 晴

B14、C14区遺物取り上げ。柱痕底レベル入れ。旧石器試掘トレンチ掘りさげ。

昭和60年 8月16日

第 9 号住居跡発掘。雷雨があつて危険、作業中止、プレハブ室内整理。

昭和60年 8月19日 晴

- C11区、C12区、D12区住居掘りさげ。住居が重複していて遺構確認が困難である。

昭和60年 8月21日 晴

- 第 9 号～第15号住居跡 床面ほりさげる。○建設省かれ草焼き。
- 第15号住居の床は第14号かまど下に床がもぐりこむ。第 9 号住居鉄。作業台（石）出土。

昭和60年 8月22日 曇り

- 第 9 ～15号住居清掃、遺物出土状態の写真撮影。

昭和60年 8月23日 晴れ時々曇

- 第 9 ～15号住居跡の実測図作成。第 8 号住居跡ほりさげる。雨がふらないので切り合い関係がよくわからない。

昭和60年 8月26日 晴

- 第 1 ～ 7 号住居の床面掘りさげる及び写真撮影。

昭和60年 9月12日 晴

- C12区清掃、写真撮影。○住居内の柱痕掘りさげる。
- C12区の溝掘り、上面に大きな石、40cm位の深さになる。

昭和60年9月3日 快晴

- 第1～7号住居の柱穴を写真撮影。第6号住居西側より硝石製紡錘車出土。住居の切りあい  
3→5→6。4。7。3と4は重なっているがどちらが古いか確認できない。
- 第9～15号住居跡 床面露出
- C12区 溝中より石匂か。

昭和60年9月4日 晴のちくもり

- 第10～14号住居掘りさげ。床面もゴボウ溝で切り合いが不明確。第11号かまととしたのは焼  
土が少なくかまととは認定できず第11号住居は欠番とする。

昭和60年9月

- 住居跡の切りあいは次のように認められる。  
第9号住→第13号住→第14号住→第12号住→第18号住

昭和60年9月9日

- 第10、12、13号床面遺物取り上げ
- かまと3～10号、12～15号写真撮影
- 溝石組露出

昭和60年9月10日 晴時々曇

- 住居跡、9、10、12～16号まで、遺物の写真撮り。
- 溝中の石を取りあげる。

昭和60年9月13日 晴

- B3区 土壌より弥生時代の丹塗り土器出土。豪奢土壌のこわされたものか。

昭和60年9月18日

- B3区土壌 遠隔実測、写真撮影

昭和60年9月19日 晴

用具整理 収蔵庫へ運搬。

## 第2章 遺構について

### 第1節 住居跡について

#### 第1号住居跡〔第3図参照〕

北側にかまどがある住居で、南北340cm、東西350cmでほぼ方形を示す。柱穴は中心に1本であろうか。又は、プランからずれるが大小とりまぜての4本とすべきなのであろうか。柱穴内の埋土からでは判断できなかった。かまどあとも残存状態はよくなかった。かまどは幅1m、奥行き90cmである。焼土からちらばる程度である。

この住居が北端あと東南方向に住居が並ぶ形で南側はC12区の溝状遺構を境にして住居跡がなくなる。ただ字上西原552番地の畠からは須恵器や土馬なども出土しており完全に住居がなくなるとは考えられない。床面高は海拔31m80cmである。ほぼこの高さで平面的に住居は広がる。

#### 第2号住居跡〔第4図参照〕

北側にかまどがある住居跡で東西440cm、南北は500cm以上を計測する。中央に焼土があるのであるいは2軒が重なっているのかも知れない。おそらく、炉跡ではないだろう。かまど付近から、土製の筋錘車が出土している。これも住居に伴う柱穴が明確ではない。南側半分が農道の下にはいり未調査である。

#### 第3号住居跡〔第5図参照〕

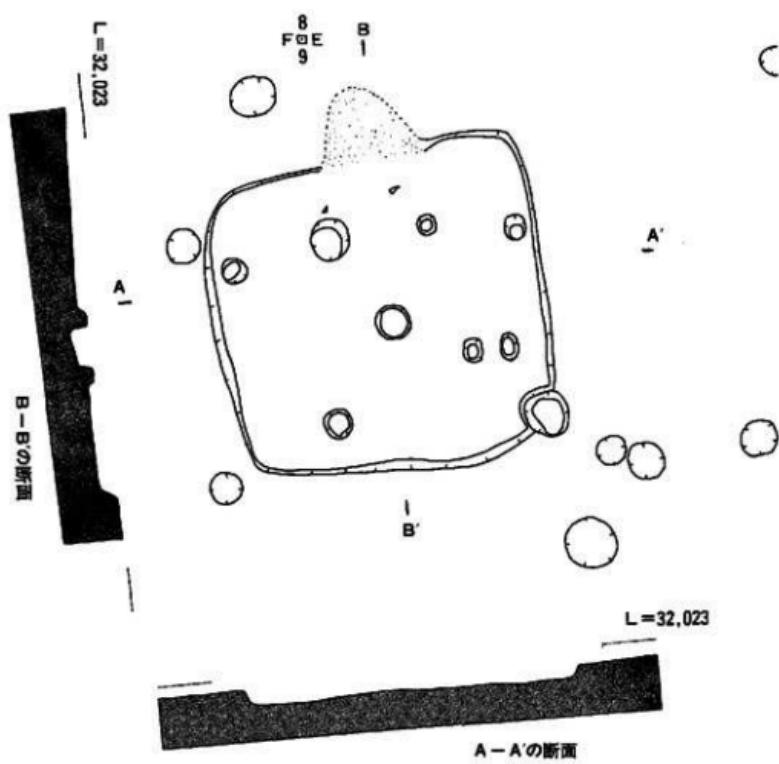
北側にかまどのつく住居跡で、北辺の東西は480cmである。ほぼ同じ形で第4号住居跡が東側にかさなる。また、南側に第5号住居跡のかまどがある。3号は4本柱であろうか。ほとんど硬化面もなく、2棟分にしては柱穴の数も少ない。また住居外にも柱穴らしいものは見出すことができなかった。

#### 第4号住居跡〔第5図参照〕

第3号と重複しているのは前述のとおりである。かまどは幅100cm、奥行き90cmである。残存状態は良くない。南東の角については明確にすることはできなかった。

#### 第5号住居跡〔第5図参照〕

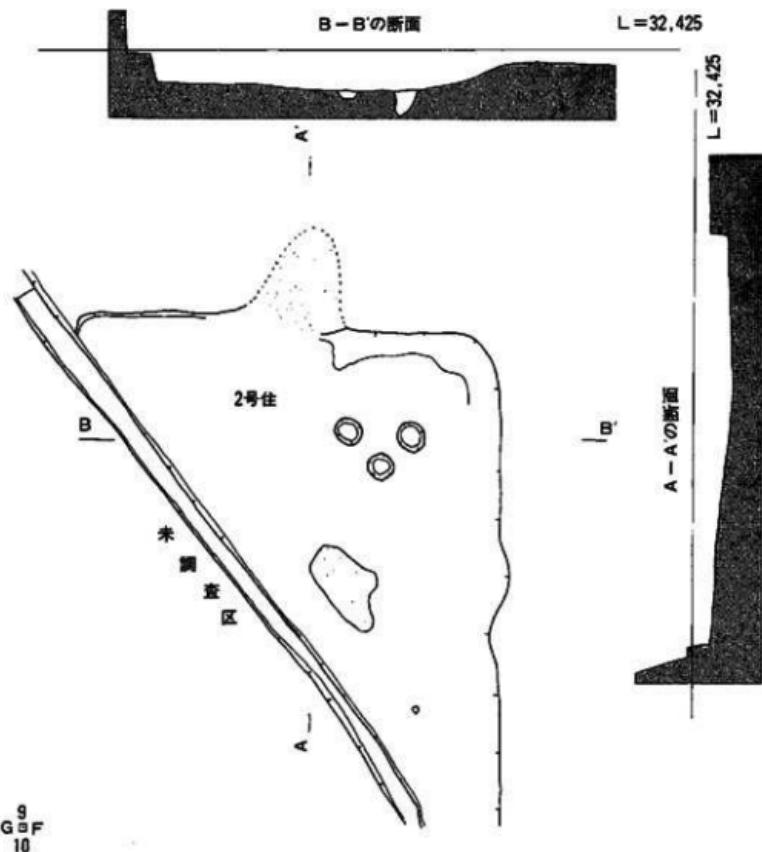
北側にかまどのある住居跡で、かまど部分は第3号住居跡と重複する。かまどの右側200cmで角がでているが、第6号住居のかまど下にもぐる。床面は南北250cmで第6号住居とかさなる。この住居はかまどの前1m位のところに、粘土が円形状にはりつけられている。中央がやや凹み、南北100cm、東西96cmの皿状になる。粘土の厚さ6cm位である。鉄物残片みたいな鉄塊が出土している。かまどの周辺には土師片が見られた。



9  
F o E  
10

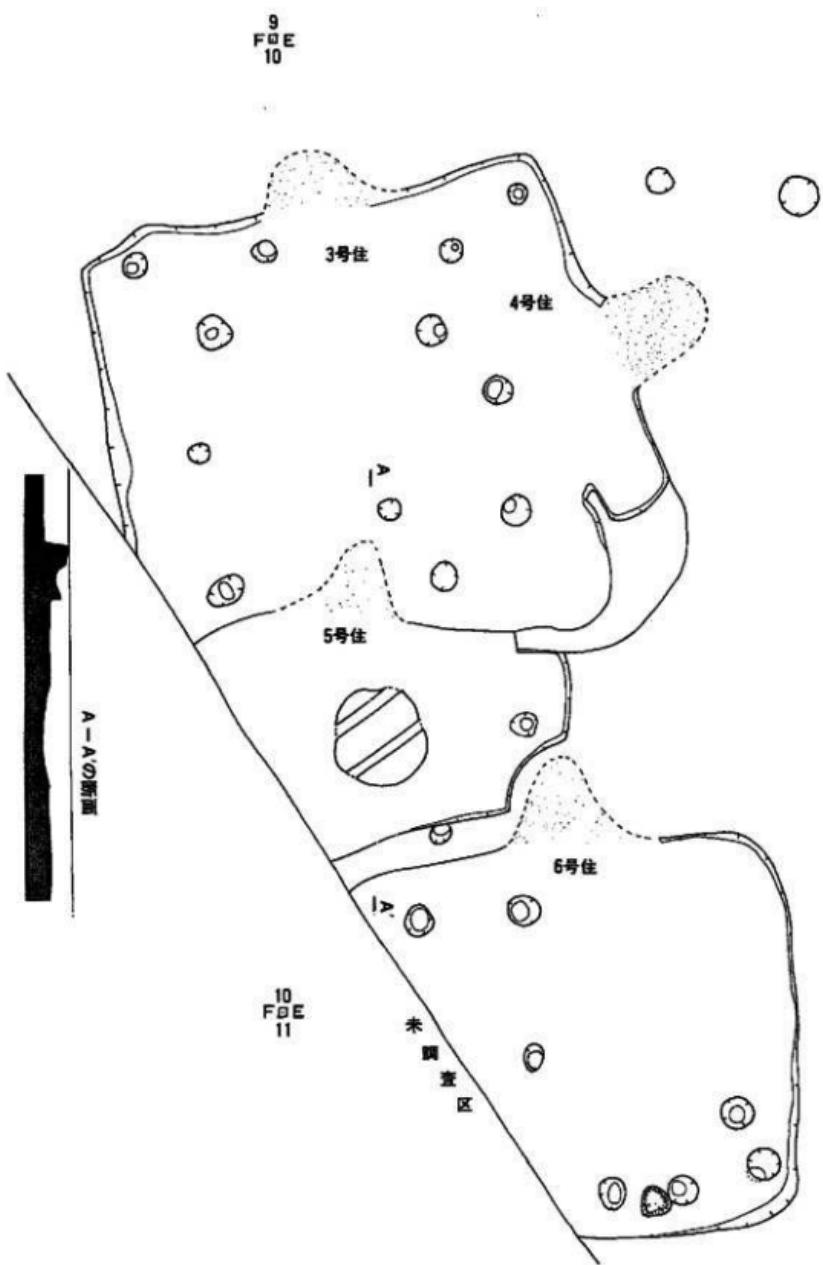
第3図 第1号住居跡 (1/60大)

G F  
9

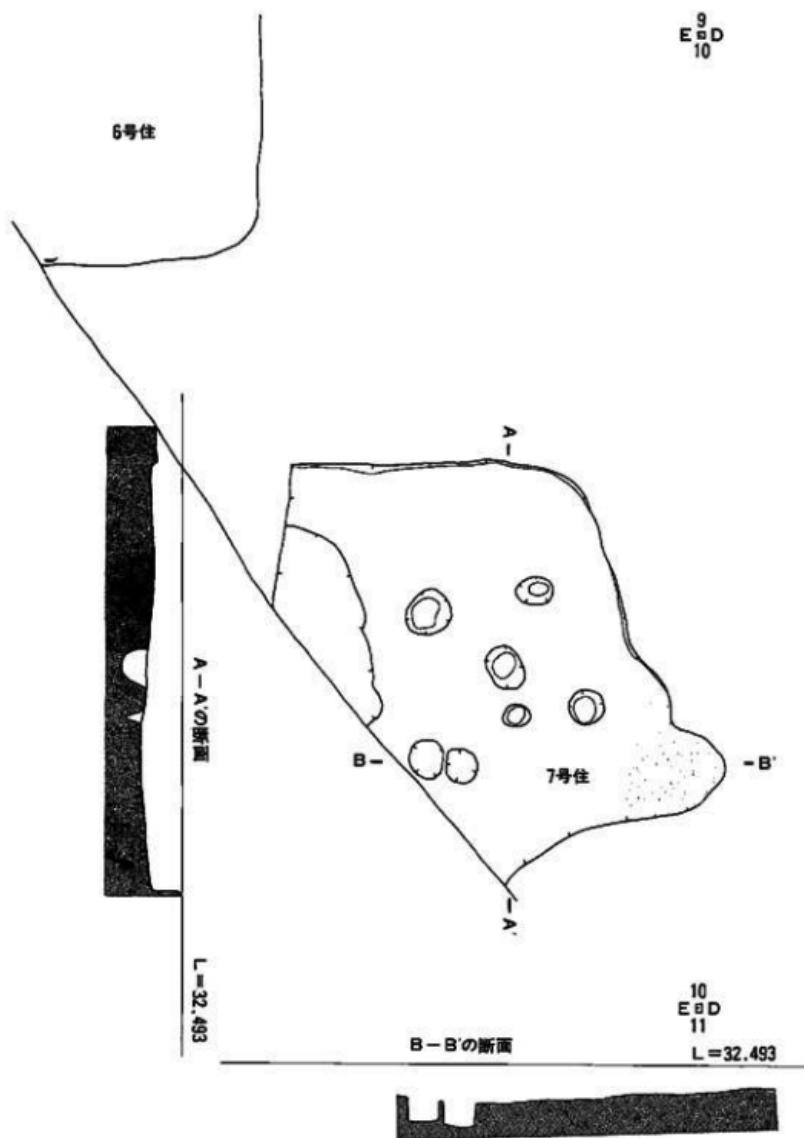


第4図 第2号住居跡 (1/60大)

G F  
10



第5図 第3号・第4号・第5号・第6号住居跡 (1/60大)



第6図 第7号住居跡 (1/60大)

#### 第7号住居跡〔第6図参照〕

東側にかまどをもつ住居跡で、かまどの残存状況は良くなかった。北西角は新しい土壌で切られ中から土師皿片などが発見された。大きさは東西350cm、南北430cmをはかり大きい。南北の幅はかまどから左側300cmあり、左右対称にすると600cm位と考えられこの遺跡群中の最大のものとなる。柱穴はこの建物も不明確である。

#### 第8号住居跡

北側にかまどがつく住居で独立家屋である。東西393cm、南北430cmにかまどが80cmのはり出しある。かまどの焼土もわずかに残存するが、これは、ごぼう掘り機械のためにふかふかになっており表土を剥ぎすぎたものである。この住居から表土を薄くはいだので、全体のプランを確認することができた。しかしごぼう掘りの機械は床面より下に達しており状態としては最悪であった。

#### 第9号住居跡〔第8図参照〕

北側にかまどがつく住居跡で東半分は表土の削りすぎで角が確認することができない。かまどの前には砂岩の軟らかいのが動いた状態で発見されたが焼けておりかまどの支柱として利用されたものであろう。これは、一段下の河岸段丘にあった西谷遺跡でも同様であった。かまどから左側は107cmで角になる。南側は約250cmで第13号住居跡とかきなり、北西角とかまどが確認された住居である。かまど9号のあるところの作業台の石までとすると約420cmになり長方形に近い住居跡となる。

#### 第10号住居跡〔第7図参照〕

北側にかまどがつく住居で、左側は農道にもぐる。かまどの右側に210cmばかりのところで、カーブする。かまど内には小片の土師器がある。かまどの焼土は左右に110cm、奥行70cmばかりでややのこり良好である。かまど第11号としていたものは、掘り下げたところ下部に焼土がなく欠番としておく。10号住居は床面は認められたが柱穴は確定することができなかった。

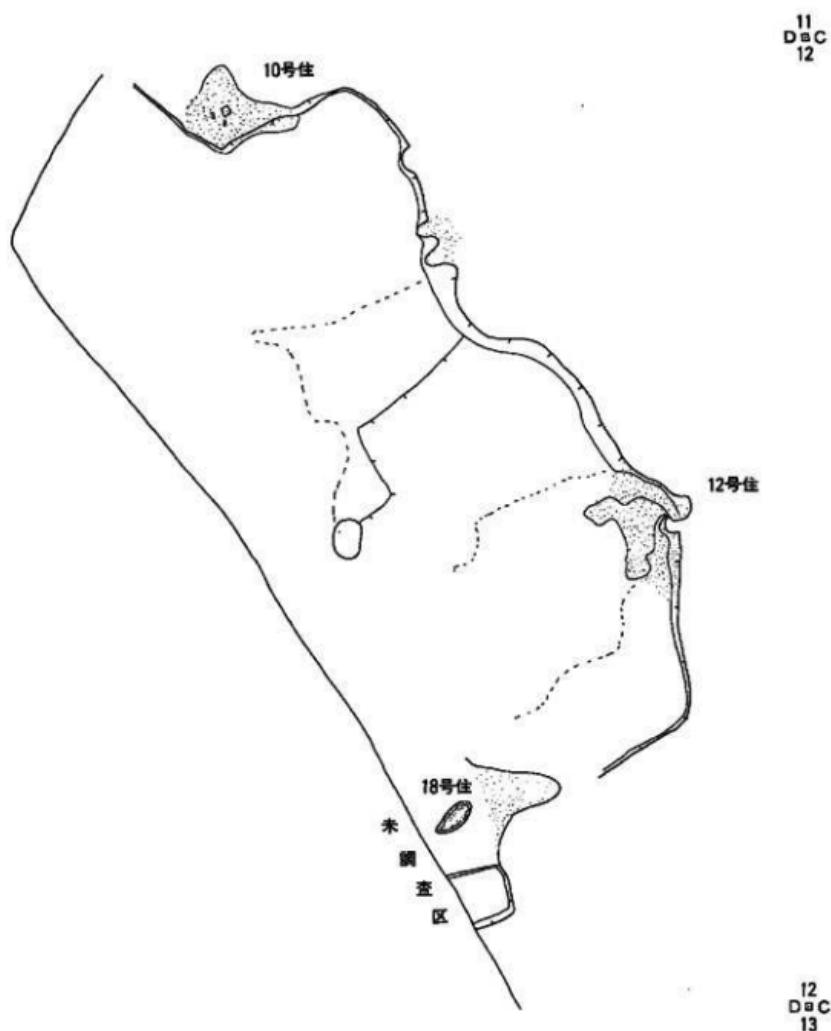
#### 第12号住居跡〔第7図参照〕

北側にかまどがあって、第14号住居跡の廃絶後にたてられている。かまど右側に210cmのところでカーブが認められる。床面は硬化面が認められたが第14号住居跡の床面と高さが同じなのでと、西側では住居端を確認することができなかった。柱穴については角になくこの住居に伴うものは確認できなかった。土製かまどの破片が出土した。

#### 第13号住居跡〔第8図参照〕

東側にかまどがつく住居でこの住居内には焼土と木炭片が見られた。西側に第14号住居跡があり、北側は第9号住居跡、南側は第15号住居跡とかきなる。全体のプランはおさえられなかつた。特に西側の第14号のかまどまでは250cmしかなく、第14号住居跡によって切られている。

#### 第15号住居跡〔第8図参照〕



第7図 第10号・第12号住居跡 (1/60大)

西側にかまどをもつ住居跡で、方角としては特異な例となる。東西の長さ420cm、南北は南壁から340cmのところで硬化面が第14号かまどの下にはいる。400cmにすれば第13号と床面が切りあう形となる。ほぼ方形で住居跡で、中心よりやや南側にかまどがよると考えられる。

#### 第18号住居跡〔第7図参照〕

第18号住居跡は第12号住居跡の南壁のところに、東側にかまどがついている住跡である。かまどは幅40cm、煙道も入れて1mの奥行がある。かまどの前に川原石(20cm×46cm)があるが、作業台として不自然なので動いたものか他の住居に伴うものであろう。南側は農道の下にはいる。住居のたてよこの長さは不明である。

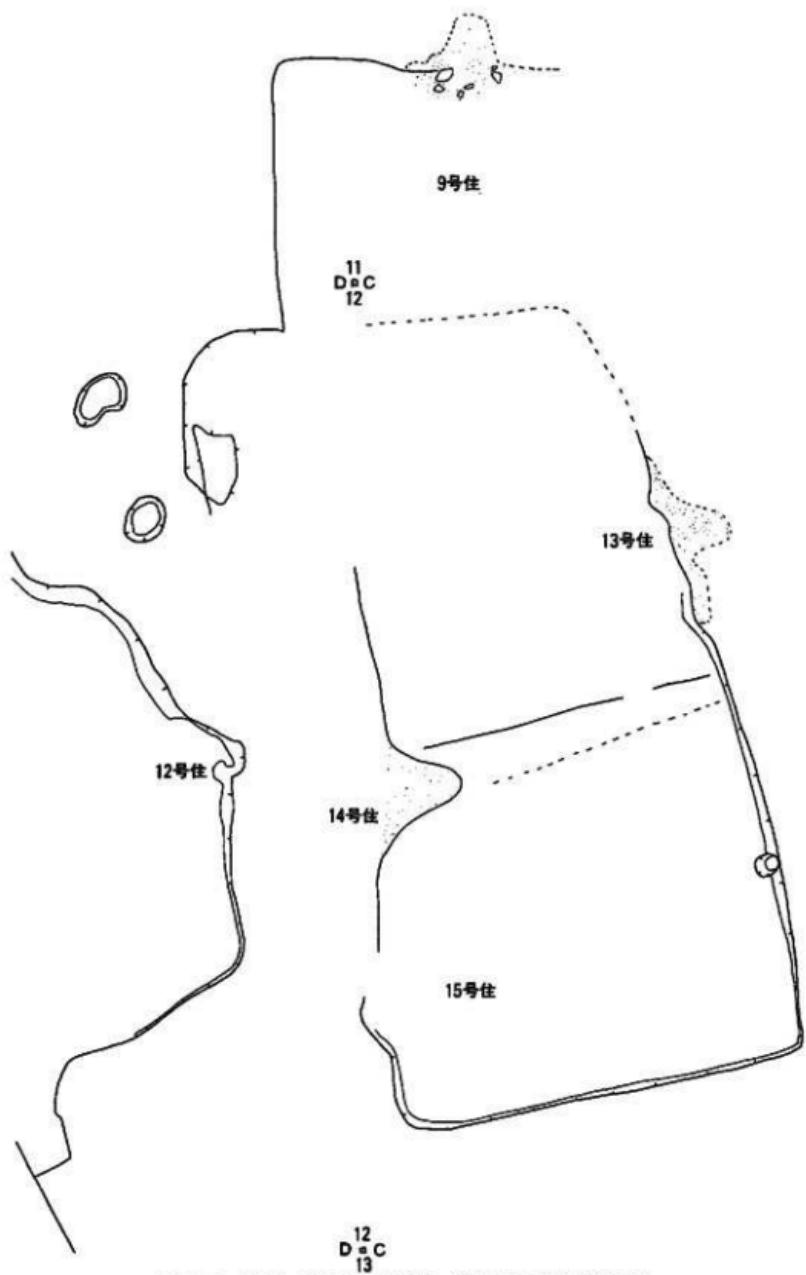
#### 掘立柱建物〔第9図参照〕

三間×三間の純柱の建物である。

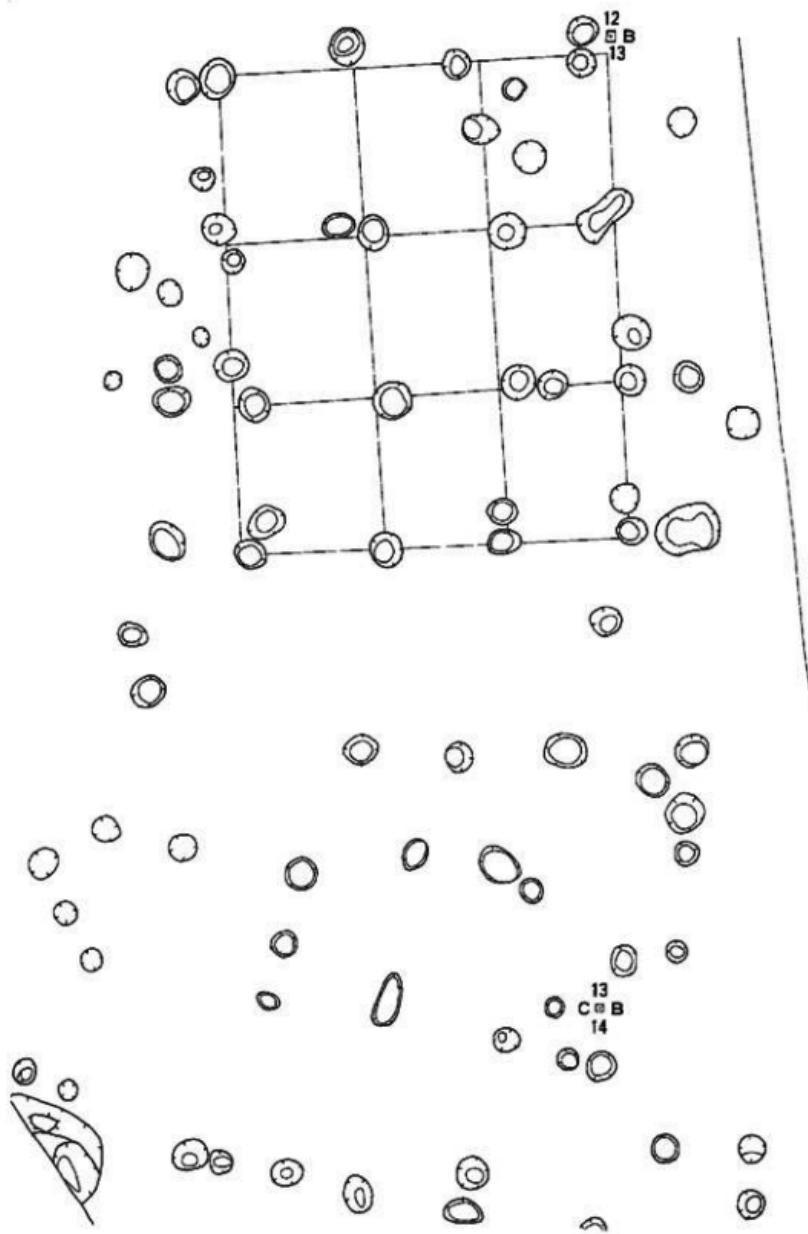
柱間間隔は東西410cmを計測し平均136.7cmとなる。南北は500cmで平均すると166.7cmである。同じところに建てかえられたものかいはずれも2穴並んだ状態にある。柱痕については土色で観察することはできなかった。No.11、12の柱穴からは炭化物(木炭)を検出した。柱穴からは根がため石など検出することはできなかった。ただ、東南隅にはもともと2穴と考えられる深い穴があって中より須恵器や土師器が出土した。整地に際して邪魔になったものを一括して捨てたものであろうか。調査地域内では他に出土例がなく、埋土も近世のものとは考えられない。

C13区、C14区も柱穴と考えられる列はあるのだが建物と積極的に認定するまでにはいたらなかった。

柱穴から鉄器(刀子、鎌)が1点出土した。



第8図 第9号・第12号・第13号・第14号住居跡 (1/60大)



第9図 C-13区総柱建物(1/60大)

## 第2節 溝及び土壙について

### B-4区道路状遺構〔第10図参照〕

B4区、C4区にかけて、断面が浅い皿状を程する道路状遺構がある。幅は100~120cmで深さは黒色土から約30cmある。この方向には東側の民家の間に里道があるので古くからの野道であろう。

### B-4区土壙〔第10図参照〕

遺構確認の段階では住居跡と見られたが、積極的に住居とする資料は得られなかった。深さ20cmで黒色の落ち込み、黒色より古い切り込みなので時代は古いと考えられる。東半分は調査区外に伸びる。南北440cm、東西200cmである。土壙内に柱穴状の遺構もあるが、遺物も出土せず、焼土も見られなかった。

### C-13区溝状遺構〔第11図参照〕

溝状遺構は、浅く東北方向に伸びており、80cm~100cm位の方形の穴となる。また、別に、幅1m位の溝状遺構が同じ方向にのびて調査区外に消える。溝の中には土師片が見られる。また土壙の中には下記のような石圓が認められた。

#### 石圓について（C12区、C13区）

C12区からC13区にわたって、幅50cm×長さ160cmの内法をもつ石圓があった。石は自然礫と一部は投げ込んだために割れたと考えられる石があった。石の間は黒色の土が堆積していたが赤土などの目ぼり等もなく分層することはできなかった。石材の間には須恵質の小さな破片が認められた。石の大きなものは長さ40~50cm、厚さ20~30cmもあり付近には石がないので人為的に白川あたりから運ばれてきたものであろう。黒土とやわらかく石積みもしっかりしていない。しかし、大きさは組み合せ箱式石棺位の大きさとなる。この土壙は幅が150cm、長さが350cmある。深さは石材の上面から土壙の底まで35cmあって、ゆるやかな皿状の凹みとなっている。

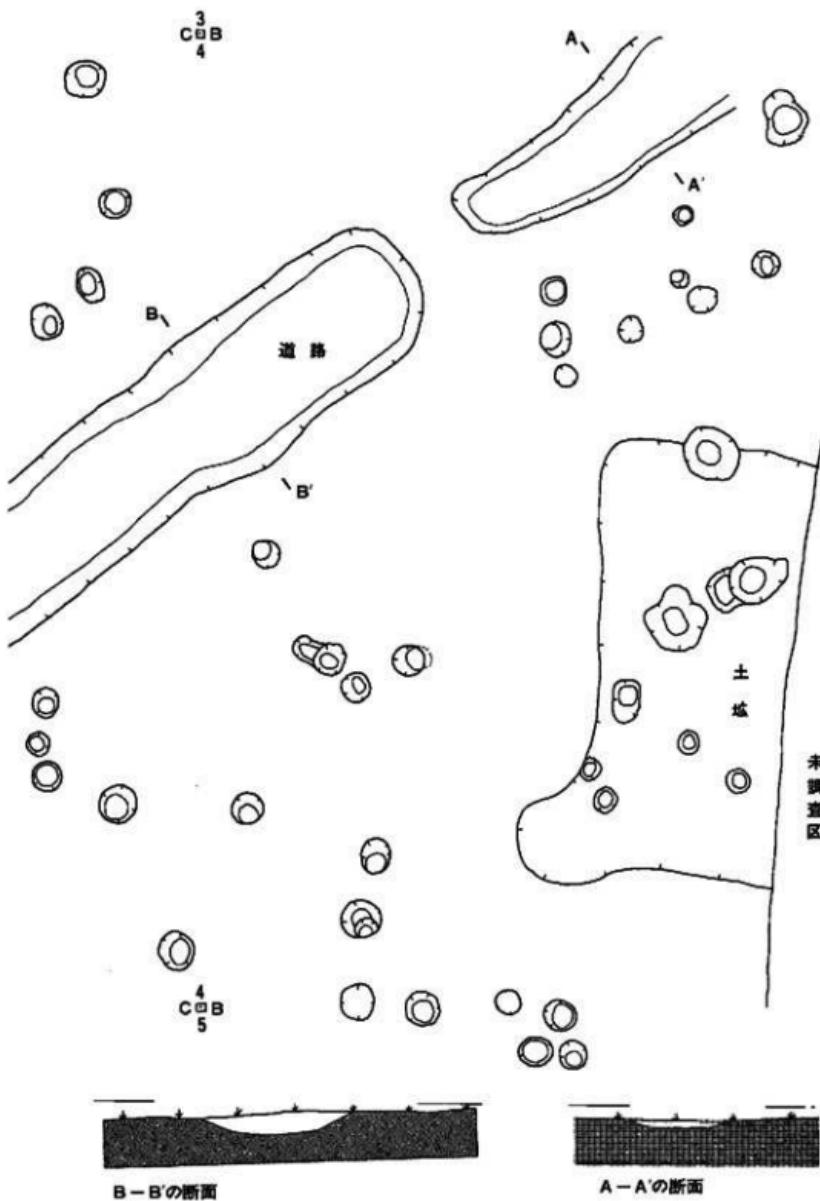
畠の境界線上にあって、樹根や竹の根をとめるために掘られた穴ではないだろうか。石が土壙の底から見ると浮いた状態にある。しかし、石圓の作られた年代も須恵器片の時代まで逆のぼらせるることはできないであろう。

#### 芋穴

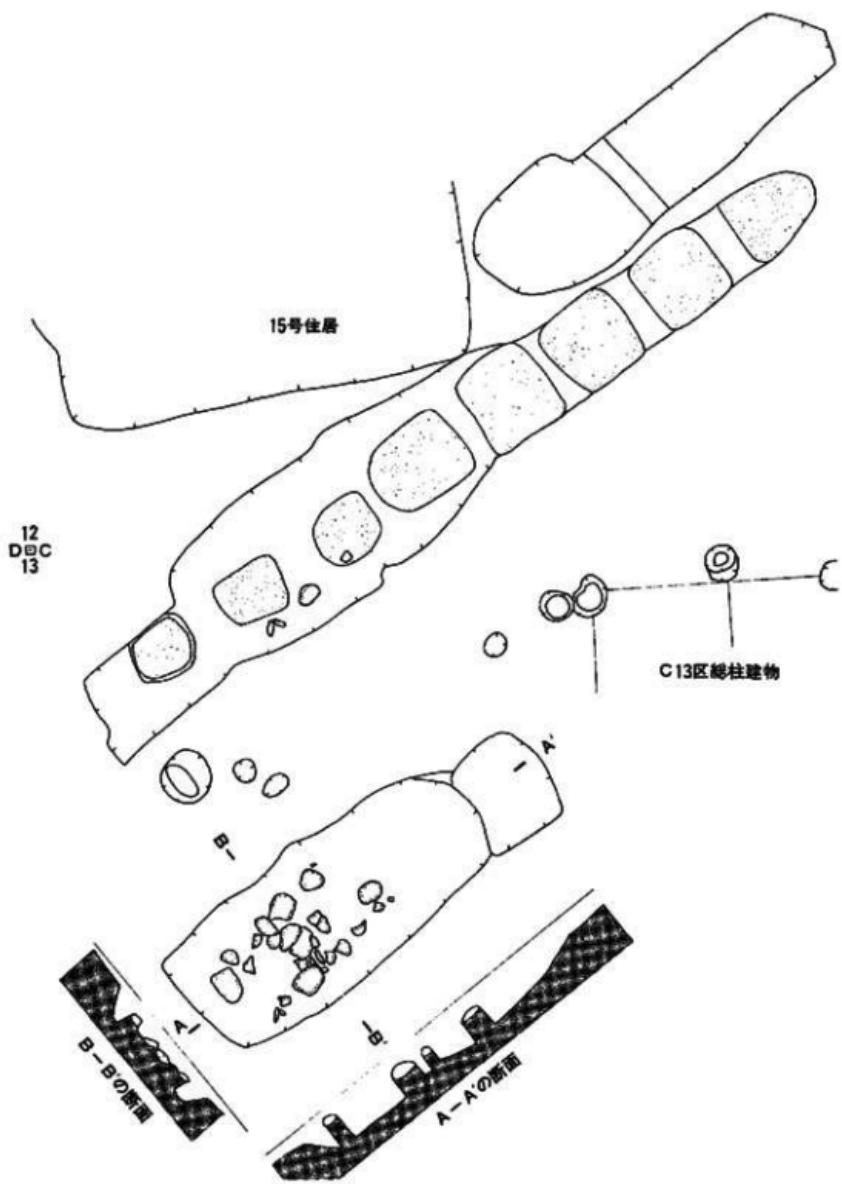
現在の畠の境界に近いところに芋穴が3ヵ所あった。径90cmで中に近世陶器も捨てられていた。

#### 赤土のはいっていた土壙

幅40cm、長さ150cm位で赤土が2ヵ所見られた。遺物は出土しなかった。



第10図 B-4区土壤及び道路状造構 (1/60大)



第11図 C-13溝状造構 (1/60大)

## 第3章 遺物について

### 第1節 縄文・弥生時代の遺物

縄文・弥生時代の遺物は多く出土しなかった。

縄文土器は塞ノ神、押形文、磨消繩文など各時代の遺物が発見された。また、付近には曾畠式土器を多量に出土する地点がある。

弥生式土器は刻目をもった特異な壺と調査地北端で丹塗の壺が出土した。これは、土壤を伴っており、壺棺墓の可能性がある。以下、若干の遺物について述べる。

#### 曾畠式土器〔第12図参照(図1~11)〕

調査地西側の畠から表面採集されたもので、曾畠式土器の単純遺跡と見られる遺物が東海第二高生、川端 武、川合勇一君によって発見されている。図12-1~11がそれで口辺部や胴部の破片で、櫛齒状の鋸歯文が施文されている。曾畠の資料例は少ないので紹介しておく。

#### 塞ノ神式土器(図12)

塞ノ神式土器はかまどつきの住居跡内から出土したが、沈線と刺突文により施文されており、塞ノ神式は本来繩目や燃糸によって施文されているのから比較すればやや退化した施文法である。

#### 押形文土器(図15)

押形文土器は円文のみ出土している。口辺部が外傾し、カブト山などの資料と同じである。

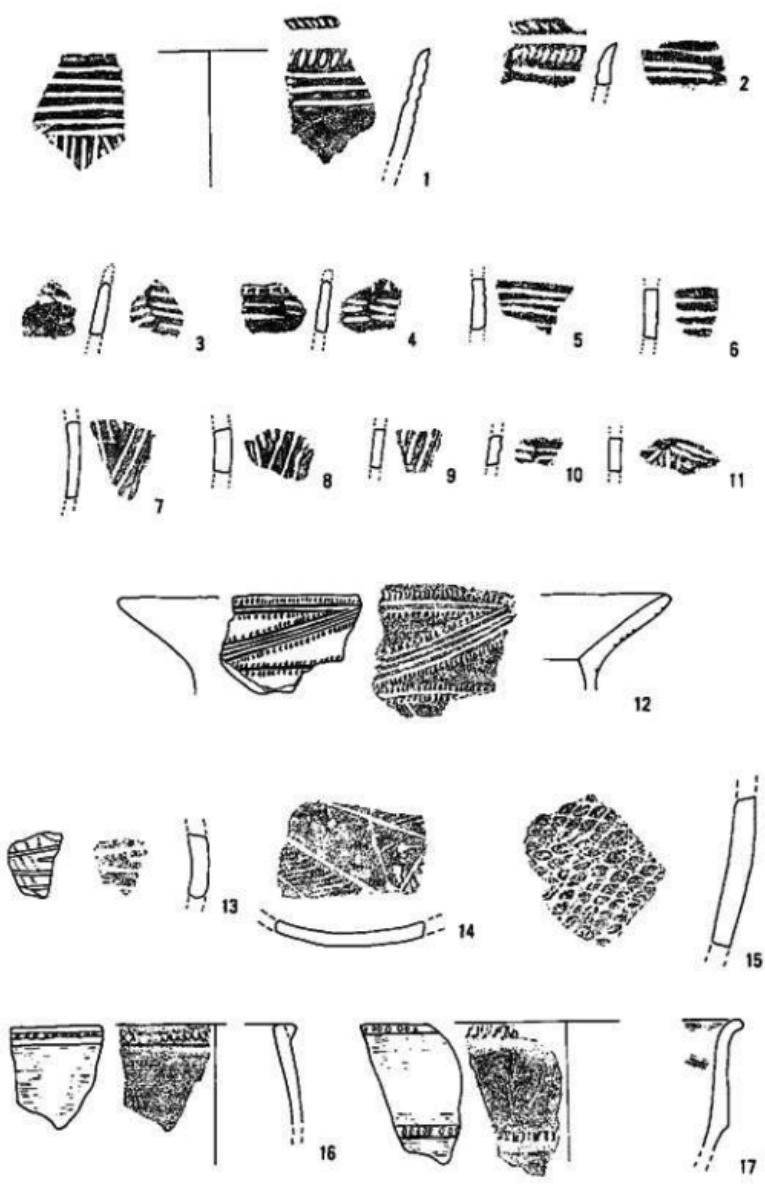
#### 磨消繩文土器(図13、14)

土器片が小片なので形式名を断定することができないが鐘ヶ崎式土器か西平式土器であろう。鐘ヶ崎、西平式土器にしても横沈線のあいだに渦巻文がはいりその間をすり消すのであるが14は磨消しの幅が広すぎる。

#### 弥生深鉢(図16、17)

口縁部に刻目の貼りつけ凸帯がある。器形は深なる。色は褐色である。表採。図16

口縁部が外反して一見して凸帯状に見える。口縁部5cmのところに段をもうけて刻目を施す。図17



第12図 繩文・弥生時代の遺物 (1/3大)

## 第2節 奈良・平安時代の遺物

奈良、平安時代の遺物〔第13図参照〕

遺物はゴボウ掘り機によって細片となっていたが、B13区の土塗のみは一括して器形の判明する土器が出土した。

須恵器 盆(図1、2)

B13区の土塗1から出土した土器一括は規格品化された須恵盆が数点出土した。口径6~7cm、高さ4~5cmで、高台付の盆で、底部はヘラ切り仕上げで、高台の切りだしは萩尾窓のような特徴は見だせない。

土師盆(図8)

器高が1.8cmと低く、その割には口径が16.0cmと大きい。焼成はやわらかく褐色で、内側に炭素の付着が見られる。

文字のある甕(図7)

第10号住居跡内から小片となって発見された甕で把手のあるところをみると「こしき」かも知れない。

土器はいわゆる赤焼け須恵器という焼成のゆるい須恵器である。須恵器の製成技法で土師器に焼き上げたといったがよいのだろう。

口径22.4cm、口縁下6cmと7cmのところに横沈線が2本、文字のあるところが、口縁下8.5cmから10.3cm、これより下は長方形の凹がつく調整具が使用されている。内側は青海波の当具が使用されている。文字より上部の口辺部は横なので調整仕上げで、文字は土器がなまかわきのときに刻字されていて、方向は甕を正常にすると上下逆になる。

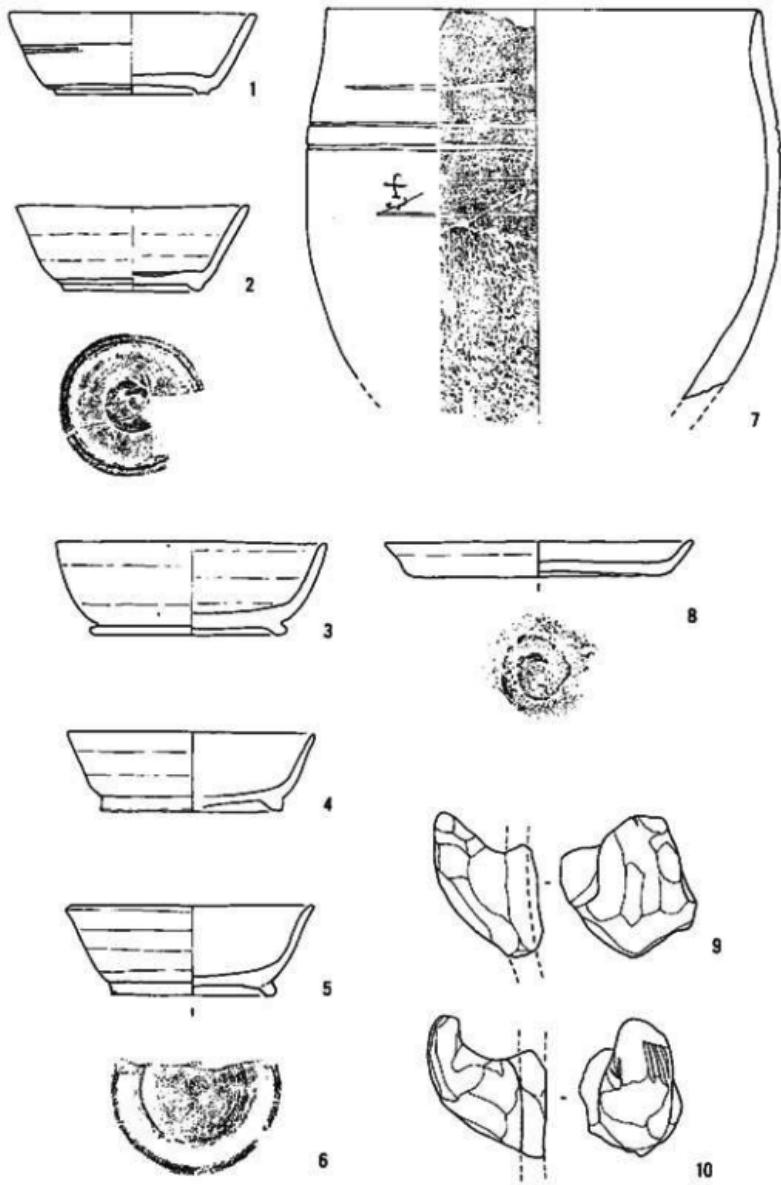
文字は「字または字」と読める。宍冠の大きさは1.1cm、1画と3画の横線の間に割れ目がはいつているがこれは宍冠である。4画が左上から右下にややさがり、はねていれば子、はねずに止めてあれば子となる。拓本で見ると4画は止めに見える。字であれば6画が横にふくらみすぎるようであり、5画の横画が長すぎる感がする。筆使い(彫りの勢い)としては、4画のはねが4画の中にもどり、子の字を意識したかに見える。

一方、文字の意味からすれば、字とればなんらかの公的な堂宇があったものかと考えられる。字であればなんと解釈したらよいのだろうか。甕は約2分の1残存するが、他の部分には文字は見られない。

こしきの把手(図9、10)

こしきの把手部分は独特な形をしているので注目される。かまどの前に必ず2個見ることができた。おそらく、甕とこしきがセットでおかれていたものであろう。

石器および紡錘車について〔第14図参照〕



第13図 須恵器・土器実測図 (1/3大)

石器類は非常に少なくこれは縄文時代の所産である。

#### 磨製石斧（図1）

磨製石斧が黒ニガ上層から出土する。長さは6.1cm、幅2.6cm、厚さ1.2cmの蛇紋岩製である。刃は広い方が使用痕が認められるもののせまい方も使用にたえるように刃がつくりだされている。このように小さな石斧は御領式など縄文後晩期の土器に伴うことが多い。しかし、この付近からは押形文の出土が見られた。

図5は大型の磨製石斧で刃部は使用によってつぶれている。刃はゆるいS字状のカーブをえがく。これは石斧が一定方向に使用されたことを示す。

#### 打製石鎌（図3、4）

サスカイトと黒曜石製の2点が出土している。図3は黒曜石製で駒形の五角、やや肩の部分がはる。厚さ0.2cm、長さ2.4cm、幅1.4cmである。

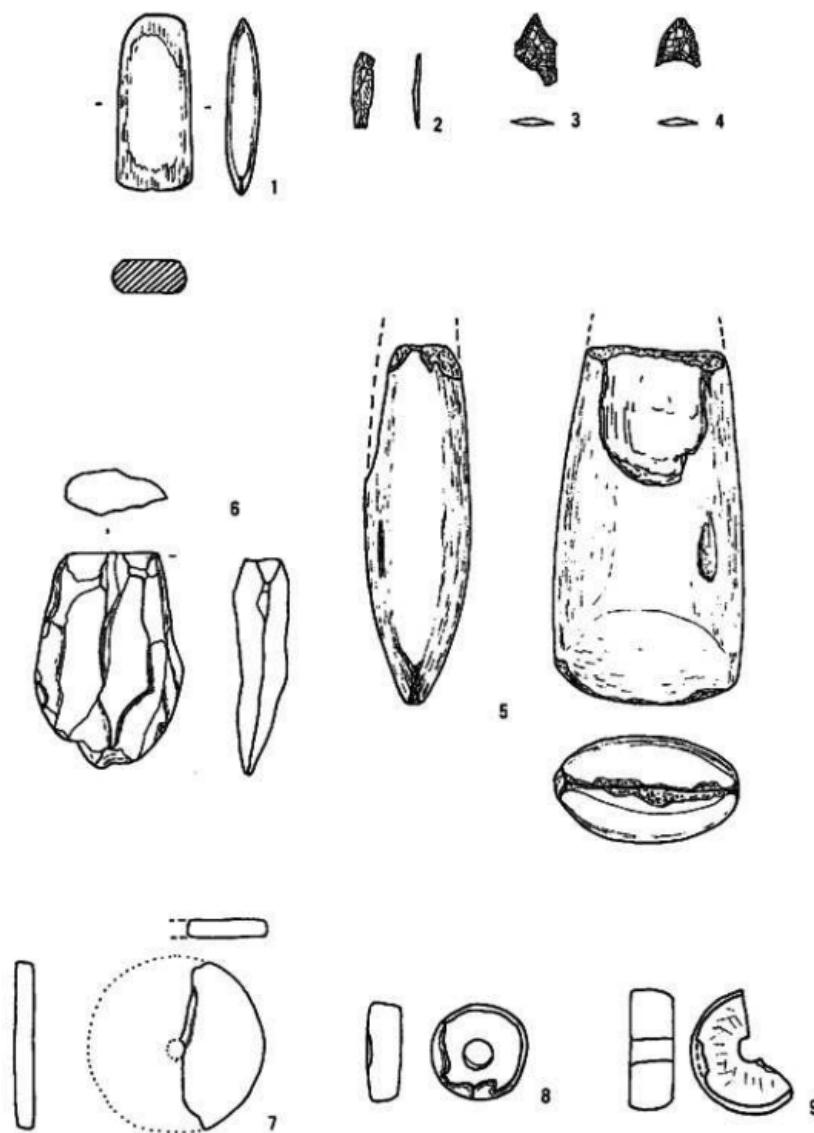
サスカイト製はやや小ぶりで幅1.5cm、厚さ0.3cm、長さ1.7cmで三角形を呈する。（図4）

#### 紡錘車（図7～9）

石製品が2点、土製品が1点出土している蛇紋岩製の紡錘車は径4.1cm、厚さ1.5cm、中心の穴は0.7cmである。使用痕が見られる。第6号住居跡の横かべから出土したが住居に直接ともなうものではない。（図9）

図8は、安山岩製で中央に穿孔しかけた穴がある。径0.8cmでレンズ状に凹んでいる。重さ30gで、径3.2cmである。

土製の紡錘車は中央の穴がやや不鮮明であるが紡錘車として利用されたものであろう。明褐色に焼けており、第2号住居跡のかまどの上から出土した。厚さ0.7cm、径6.4cmである。（図7）



第14図 石器及び紡錘車実測図 (1/2大)

### 鉄器類について（第15図参照）

小片について、ゴボウ堀りの溝のために近世のものも混入しており区別はできない。

ここでは6号住居跡出土の鎌と鉄鎌、やりがんな、刀子と思われるものと5号住居内の鉄塊を紹介しておく。

#### 鉄鎌

図1は鉄鎌であろう。長さ12.5cm、幅0.5～0.6cm先端が薄くなりとがる。断面は四角形である。

#### 刀子

図2は刀子で木質部が付着する。現存の長は、刃部2.9cm、茎部6.3cmである。図7は長さ4.3cmである。断面三角形でややくびれのあるところを見ると刀子と考えられる。

#### 鉄塊

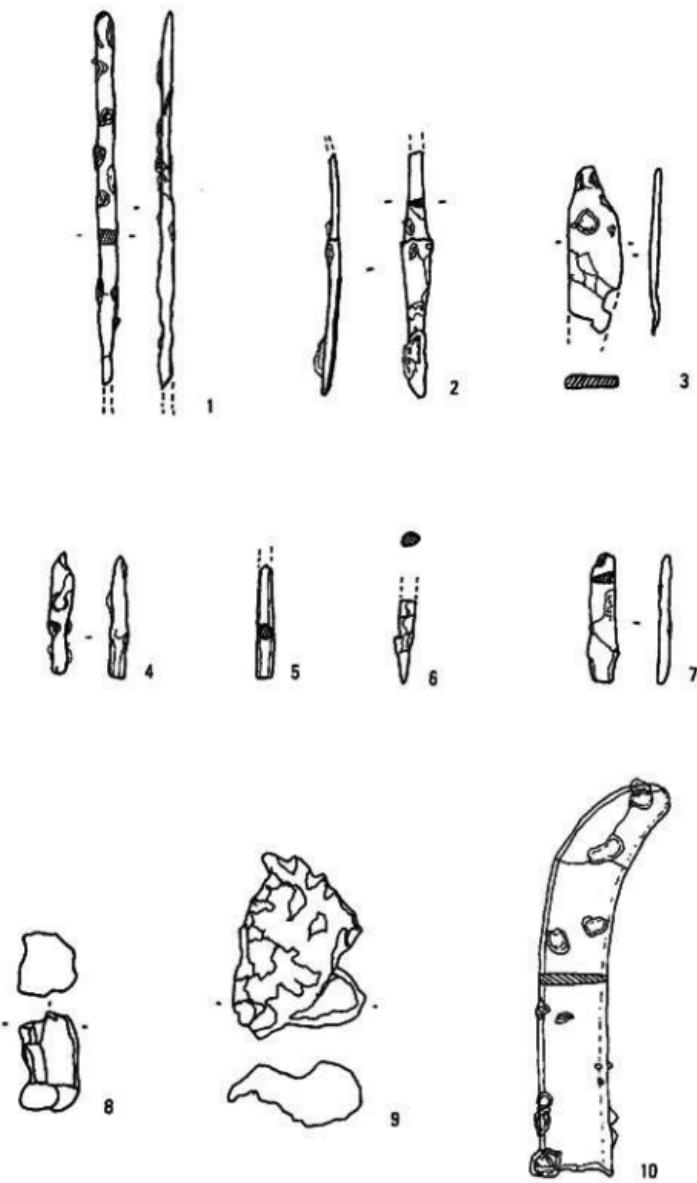
重さ62gで鋳型に流し込んだ残りをすてたものがたまたのような形である。住居内の円形の粘土の床と関係があるのかも知れない。（図9）

図8は土偶の足みたいな形であるが新しいものではないようだ。

#### 鉄鎌

幅2.3cm、長さ13.4cmで先端が内側にまがる。柄の部分は折損しているようだが折りかえしたものであろう。第6号住居部の壁にそって出土した。刃部は薄くなつておりもともと鋭利な刃物であったことがわかる。（図10）

以上鉄器は、武具としての鉄鎌、工具としての刀子、農業生産具としての鎌が見られる。また、鉄塊もここで工具に生産されたものであろうか、今後の研究課題となろう。



第15図 鉄器類実測図 (1/2大)

### 第3節 その他の時代の遺物

調査面積が広いせいか新しい時代の遺物も採集された。日用雑器である陶磁器が多く見られた。ここでは上西原遺跡とウバの塚の陶磁器を若干図示する。

宇土市網田で生産された白磁は細川藩の御用窯である。藩の手から離れると日用雑器を焼きはじめ明治から大正にかけての生産量はすごいものがある。また、現在も使用されている印判手の皿はどんな遺跡からも採集されるほどである。

#### 鉄釉土瓶陶器（第16図参照（図1））

高さ11.9cm、口径6.0cm、腹部最大径16.6cmの土瓶である。胴部やや下に稜線をつくる。釣手のよこから口縁下まで横沈線を施す。外側は口上縁及び稜線より下は釉がかかっていない。内側は口縁下2cm位まで釉がかかる。内側の下部はロクロを引き上げたところがよく見える。胎土は赤色で焼きは低温である。釉の色は青緑色である。破損品で蓋はない。出土地はC5区である。

#### 湯飲み茶碗（図2）

胎土は白色であるが磁器化寸前である。青の発色がわるくやや低温であったのであろう。口まわりは青の中にうす黒く発色しないところが残っている。菊花状の花が2ヶ所見られるがこれは黒色を呈している。口径7.4cm、現存高は4.7cmである。C5区出土。

#### 湯飲み茶碗（図3）

白磁で、青の蔓草の文様がある。クラウンカ型のゆのみか。第6号住居から出土する。

#### 小代焼湯飲み茶碗（図4）

小代焼の象嵌手法のかけら小片でハート形と菊花形の象嵌がある。色はやや緑を帯びた茶色に白色土の象嵌で、古色をおびている。市内の松尾焼の破片かも知れない。

#### 一升徳利（図5）

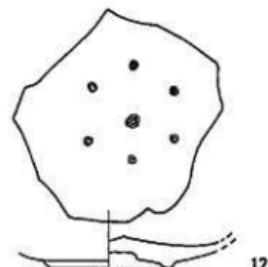
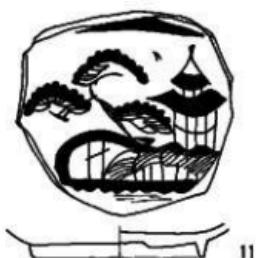
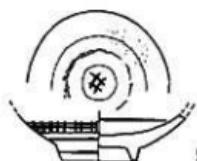
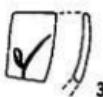
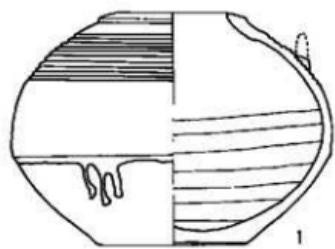
底部から8cmの高さまで残っている。明治以降の徳利でおそらく文字のみではないかと考えられる。番号を示す「号」の文字が読める。高台径8.4cm、内側にロクロ引きの横線が見える。胴部径16.6cmをはかる。C5区出土。Na23

#### 茶碗の蓋（図6）

外側に垂弧文、内側に細い平行線を画く。断面のカーブから見ると茶碗の蓋であろう。色はコバルト青である。

#### 二重網目文碗（図7）

小片であるが、「満福」の印が底部中央にある。外側は二重の網目文である。江戸末期の作であろう。高台径5.0cmである。内側は菊花弁を中心配し、網目文が口縁部に伸びる。色はうすい青である。



第16図 陶磁器実測図 (1/3大)

### 茶碗（図8）

見込みの中に重ね焼のあとがのこりすすきのような2本の平行線がはしる。その外に1本の線がめぐる。外側は高台に横線2本、底部より1.5cmのところから口部に向けて2本の平行線がフリー手でにかかれている。高台径は5.0cm、高さ0.8cm、疊付は釉薬が施されていない。

### 見込み井げた文様皿（図9）

見込み蛇目釉刺ぎの手法で、見込み中央に「井」の文様がはいる。そのまわりに線が1本めぐる。砂が付着している。口台径4.0cm、現残高2.4cmである。外側は高台に1本、底より1cmのところに横線がはいり、2本の平行線が口部に縦に伸びる。これに、直角に横線がはいり格子目文様となる。ニッ枝円形周溝のミゾより出土。No85

### 唐草文様皿（図10）

「3」の文字の繰り返し文様で全体の文様はつかめない。胎土は白色で内外とも入が見られる。終筆のところは黒く発色している。高台径は5.4cmで、高台は0.3cmとあまり高くない。ミゾより出土。No91

### 望楼圆皿（図11）

湖を白ぬきで表現し、対岸に島を配する。手前には松の枝の表現であらうか、右に2間の望楼がある。色は青一色の筆書きである。器形は皿で、高台径は9.0cmとやや大ぶりである。高台内側は蛇ノ目釉刺ぎである。胎土は白色である。

### 足付ハマ培着痕のある皿（図12）

白色の皿で文様はない。高台径は6.5cmとやや大きくなる。内側のロクロの中心と高台の中央とはややすれており全体の形もいびつである。

内側の足付ハマの培着痕は正六角形と中央に1点あり7本脚であることがわかる。18世紀から19世紀、特に19世紀に盛行する。ミゾ出土。No82

### はたけ人形

長さ2~3cmの粘土製の人形で、人面以外に動物の顔や野菜、くだものなどの形をしたものがある。

1つには正月に畠などに作物の豊作を祈ってばらまいたもの、他の1つは庭先などでメンコ遊びに使用されたものが堆肥などとともに畠に運びこまれたものがある。

## 第4章 まとめ

調査域全面にごぼう掘削機による溝があり遺物は、ほとんどが細片となっていた。住居の構検出も困難をきわめ、特にD12区における住居の重複はかまどの方向によって、かろうじて軒数がわかる程度であった。遺物の時代的变化はあまり見られず、この住居が短期のあいだに4回も建て替えられたであろうと推測される。

住居内は精査したにもかかわらず建物に伴うと考えられる柱穴を確定することができなかつた。かまどの形成にあたって砂岩の礫を支柱としてかまど入口に使用したと考えられるものが9号住居跡で見られた。また、12号住居跡からは粘土で作成された土師製のかまどの断片が出士した。床面については硬化面が見られるのが多数であるが、ここではごぼうの削掘溝のため床も軟らかくなっていたが、9号住居などで確認することができた。以下住居の切り合いについて述べる。

### 住居の切り合いについて

1号

2号+α

3号 → 5号 → 6号

↓

4号

7号

8号

10号

13号 → 9号

15号 → 14号 → 12号 → 18号

16号

17号

(11は欠番)

住居の切り合いについては、上記のように考えられる。これに、掘立柱の建物2棟があったことになる。最大限11かまと2棟であろうか。第1河岸段丘と現在地のあいだには現在も繁茂している樹林帯があったのであろうか、A8区以北について住居を検出することができなかつた。これは、昨年の冬の調査中にも河から吹き上げる北西の風は強く冷たくきびしいものがあった。台地端をさけ南側によって集落が形成されたものと考えられる。以下調査時点におけるかまどの高さを表示しておく。このかまど面から住居床までは20~30cmである。

かまど現存上面高は下記のとおりである。

No 高さ

K 1	31.840
2	31.956
3	31.999
4	31.010
5	32.021
6	32.001
7	32.124
8	31.783
9	32.052
10	32.145
11	32.158
12	32.204
13	32.144
14	32.190
15	32.217
16	32.698
17	32.157

出土遺物については上西原552番地から土馬が採取されており、同地番内も調査するのでなんらかの祭祀に関する資料が得られるのではないかと考えたが土馬の出土はなかった。B 3 区において、丹塗弥生甕の埋葬された土壌が発見された。弥生時代中期の所産であろう。縄文土器はF 6、F 7、G 6、G 7 区付近から押型文土器が発見された。第5号住居内から塞ノ神式土器が1片出土した。又E 7、F 7 区では礎直上の赤土まで掘り下げたが旧石器を検出することはできなかった。

B13区の土壙 1 から発見された土師、須恵器は同一時期の所産と考えてよいだろう。掘立柱の建物の東南角にあたる整地した時に出土したものをまとめて埋めたものであろうか。又建物に伴う祭祀に使用したものを破壊して埋めたものであろうか。須恵器窯は小山戸島の山で古代の布目瓦が焼成されているので、おそらく近くで生産されたものであろう。

10号住居から出土した文字「字又は字」と見られる文字は刻字資料としては新しい文字を提供した。文字の書かれていた土器は須恵器のやきもどし、赤焼け須恵器と称されている焼成のやわらかい須恵器である。焼成前に刻字されたものである。字のまわりには1文字しか認めら

れないが全体の2分の1ぐらいしか残存していないので他の部分にも文字があった可能性もある。

陶磁器については芋穴とかゴミ捨てによる近世の遺物であった。西谷地区をあわせ15～20軒ぐらいの奈良から平安時代にかけての集落がいとなまれていたと考えられ、広い意味で託麻野の中の1集落と考えてよいだろう。立地から河による生活、水田と畑作が考えられる。かまどに瓦を使用した西谷などを考えるとその人々が瓦の堂宇を身近に見た可能性が考えられる。

# 潤野遺跡

## 目 次

第1章 調査の方法.....	51
第2章 ウバの塚について.....	57
1　円形周構造について.....	57
2　遺物について.....	59
第3章 その他の造構について.....	64
第4章 まとめ.....	65

### [挿図目次]

- 1 うろごの遺跡トレンチ設定図
- 2 宇土市大字立岡（字接合図）
- 3 ウバの塚
- 4 ウバの塚 遺物実測図
- 5 ウバの塚 遺物実測図
- 6 ウバの塚南側

### [図版目次]

- 1 上 清掃前のようにす 下 清掃後のウバの塚
- 2 上下 ウバの塚 南側より
- 3 上 ウバの塚 下 石臼の出土状況
- 4 上 ウバの塚西側 下 ウバの塚東側
- 5 上 ウバの塚封土除去後 下 溝の確認
- 6 上 溝完掘（西側より） 下 （東側より）
- 7 上下 封土表面の遺物の散布状況
- 8 上 火舎部分 下 獣脚出土状況
- 9 上 溝状遺構完掘（上 南側より、下 西側より）
- 10 溝状遺構確認（上 南側より、下 西側より）
- 11 上 2トレンチ北側
- 12 上 3トレンチ南側 下 3トレンチ北側の土壤
- 13 4トレンチの遺構（右列は植栽のあと）
- 14 P 118地点トレンチ
- 15 上 調査地遠景（北より） 下 岡崎家墓地の五輪之塔
- 16 上 墓崎古墳 下 家型石棺
- 17 ウロゴノ遺跡試掘トレンチ（柱穴か）
- 18 ウロゴノ遺跡試掘トレンチ（上 P 132地点、下 P 133地点）

## 第1章 調査の方法

潤野古墳の存在する山塊から、西北に小さな台地が岬のように3叉状に伸びる。その1つに立岡の集落があり、1つにはウバの塚があつて宇土市立花園小学校の裏にある。標高は海拔13mで、水田との比高は約5mである。独立丘陵に近い晚免古墳のある位置とウバの塚と潤野古墳は直角三角形の各頂点に位置する。

このことは、資盛の墓（潤野古墳）と安徳天皇の墓（晚免古墳）、それに伴う「ウバの墓」の伝説を産む。その主たる原因是潤野古墳出土の石棺蓋に落書きされた「平資盛」の文字であろう。これは、宇土市史研究に図版入りで紹介されているが落書きした本人も生存しており、近く本人からの聞き書きも発表されるところで、そのいきさつは、いずれ明確にされるであろう。

肥後国誌には下記のような記載がある。

（補）資盛墳墓 龍巣云或人予ニ告テ日宇土郡立岡村堤池ノ傍ニ於テ近年里農岸ヲ崩シテ石棺ヲ掘出ス檢之ニ帰入資盛ノ四字ヲ彫リ其餘銘文ト見ルヘキモノナシ皆云資盛ノ墳墓ナルヘシト按ニ資盛ハ内府重盛ノ二子嘗テ途ニ攝政基房ニ遇テ禮ヲ失ス重盛大驚資盛ヲ伊勢ニ逐フテ其身ヲ禁錮ス文治元年三月廿四日墳ノ浦ノ戦ニ知盛教盛經盛行盛有盛等ト共ニ投海テ死之云々

ウバの塚については宇土市教育委員会により「二ツ枝古墳」の標木がたてられており、円墳の周辺が発見される可能性もあり本調査とした。

### 調査の方法

試掘調査とウバの塚の本調査を実施した。試掘は潤野とウバの塚の周辺に入れた。潤野はP130地点の東側に中心線に平行に試掘トレントを100m入れた。また20mおきに中心に向けて農道まで歯状に試掘トレントを入れた。北側から11m、18m、17m、13m、13mの長さで、表土の下は黄色粘土で2～3の柱状落ちこみはあったが遺構につながるものとは考えられなかつた。東側に南北に入れたトレントでは唐芋穴の貯蔵穴と畠界の溝穴が確認できた。

ウバの塚の周辺は中心線に平行にP120地点からP122地点まで、西側のP120地点からP121地点まで、東側にウバの塚の周構がないかP121地点からP122地点まで、中心線に直交してP121地点の東端から西端まで、P122地点の東端から西端まで5本の試掘トレントを入れた。

塚のまわりは2m方眼のトレントを組み、標高海拔14,000mの高さのところに矢板を打ちいつでも遺物がとりあげられるようにセットした。

昭和60年10月21日 晴

○試掘トレントをユンボで入れる。P123付近のボックス作業の時に土層断面が出ているので表土が深くないことがわかった。

○塚のまわりにトレンチを入れたが古墳に伴う周溝は見られない。

昭和60年10月22日 晴

○トレンチ内の清掃作業

○潤野遺跡にコンボ移動。P130地点よりP134地点まで、東端に試掘トレンチを入れる。20m  
おきに道路中央に向ってトレンチを入れる。

○芋釜2コ、1つはモミ殻がはいっている。

昭和60年11月5日

○塚のお祓いをする。

○1トレンチの北側及び4トレンチの清掃をする。柱列あり。

昭和60年11月11日 曇時々雨

○プレハブに机、ロッカー、ストーブ等搬入。

昭和60年11月12日 雨のち曇

○4トレンチ延長及び掘り下げ。

昭和60年11月13日 くもり

○第2トレンチ及び第3トレンチ清掃

昭和60年11月14日 くもり時々雨

○前夜の雨でしめているので塚のまわり掘りさげをする。

○潤野遺跡トレンチ壁の清掃。

○塚南側の耕作溝より近世陶磁片出土。

昭和60年11月15日 曇

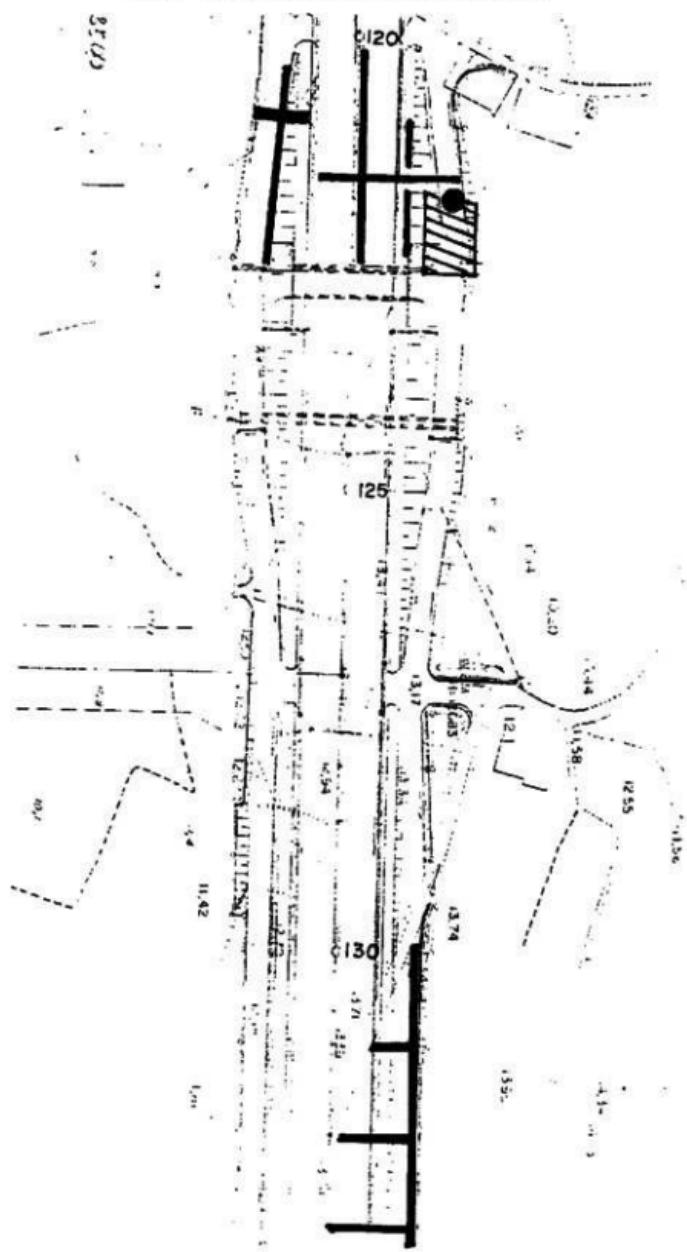
○P191からP118に向って、中央線より東側に2m四方のトレンチを5個入れる。

昭和60年11月18日 雨のち曇り

○118地点のトレンチ掘削

○青磁碗片出土する。

第1図 うろごの遺跡トレーニング設定図 (1/1000大)



昭和60年11月19日 快晴

- 塚を4分の1掘る。熊本工事事務所より、火舍、摺鉢（6本線のもの）、布目瓦（平瓦）須恵器の杯及び皿。瓦器、唐津焼茶碗

昭和60年11月21日

- 塚より弥生土器出土、凝灰岩の切石岩の切石。
- P119～P117まで掘りさげる。北側の崖に向って埋土がふかくなる。P119地点はブルトーザーによる掘りさげかと思って地元の人聞いてみたが、整地の記憶はないとのこと。滑石製鏡出土。

昭和60年11月22日 曇のち雨

- 塚のまわり、土手を残して掘りさげる。
- 4トレンチの柱穴250cm

昭和60年11月25日 快晴

- 塚周辺遺構確認写真。
- 塚のまわりの溝から、火舍及び磁器硝子（筒状）。

昭和60年11月26日 晴時々くもり

- 塚のまわり溝ほりさげ。溝底より壺出土。昭和10年代に埋まったものか。
- 桑溝ほりさげ。
- 宇土市で文化財保護大会あり。

昭和60年11月27日 快晴 暖し

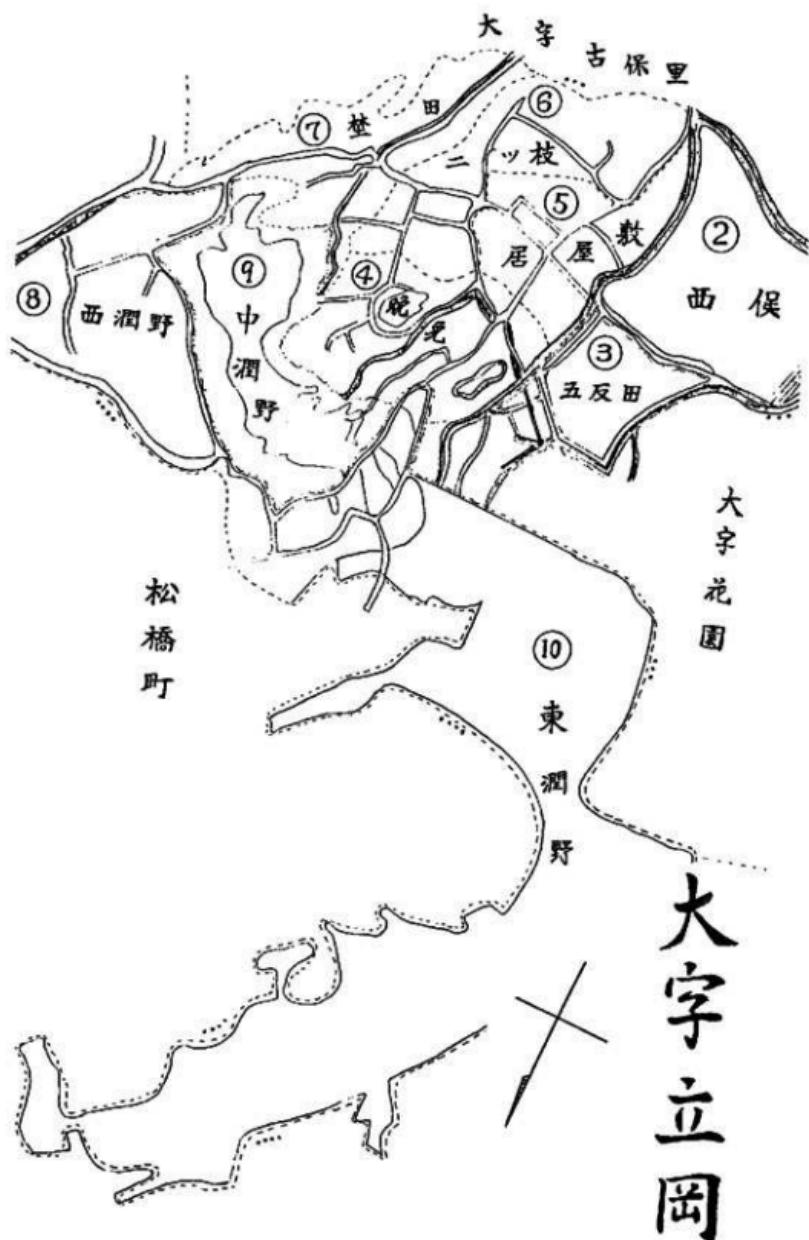
- 塚まわり掘りあげて写真を撮る。
- 桑溝実測する。

昭和60年11月29日 晴

- 塚まわりの実測。くさりが溝から出土する。
- 塚まわり、桑溝周辺の土手はずし。

昭和60年12月2日

- 塚南側遺物出土掘りさげる。ねこの死がい出土。



第2図 宇土市大字立岡（字接合図）

○磨製石剣片出土。

昭和60年12月3日

○塚まわり清掃写真撮影

○栗畠（4トレンチ）清掃

昭和60年12月4日

○4トレンチ柱穴掘りさげ。柱穴中の木炭は木を植えた時に、下肥として入れたものであろう。  
清掃、写真撮り。

昭和60年12月5日 晴 朝霧

○2トレンチP120地点掘りさげる。

昭和60年12月9日 くもり あられふる

○3トレンチ、掘りさげる。4トレンチ、写真撮り。

昭和60年12月10日 晴

○4トレンチ、1トレンチの発掘。プラン平板実測。

○塚の掘りこみに等高線を入れる。

昭和60年12月11日 くもりのち晴

○1、2、4、5トレンチ写真撮影

○ちこみをほるも遺物なし。風倒木、自然的なおちこみか。

昭和60年12月19日

○遺物取りあげ

○荷物整理

## 第2章 ウバの塚について

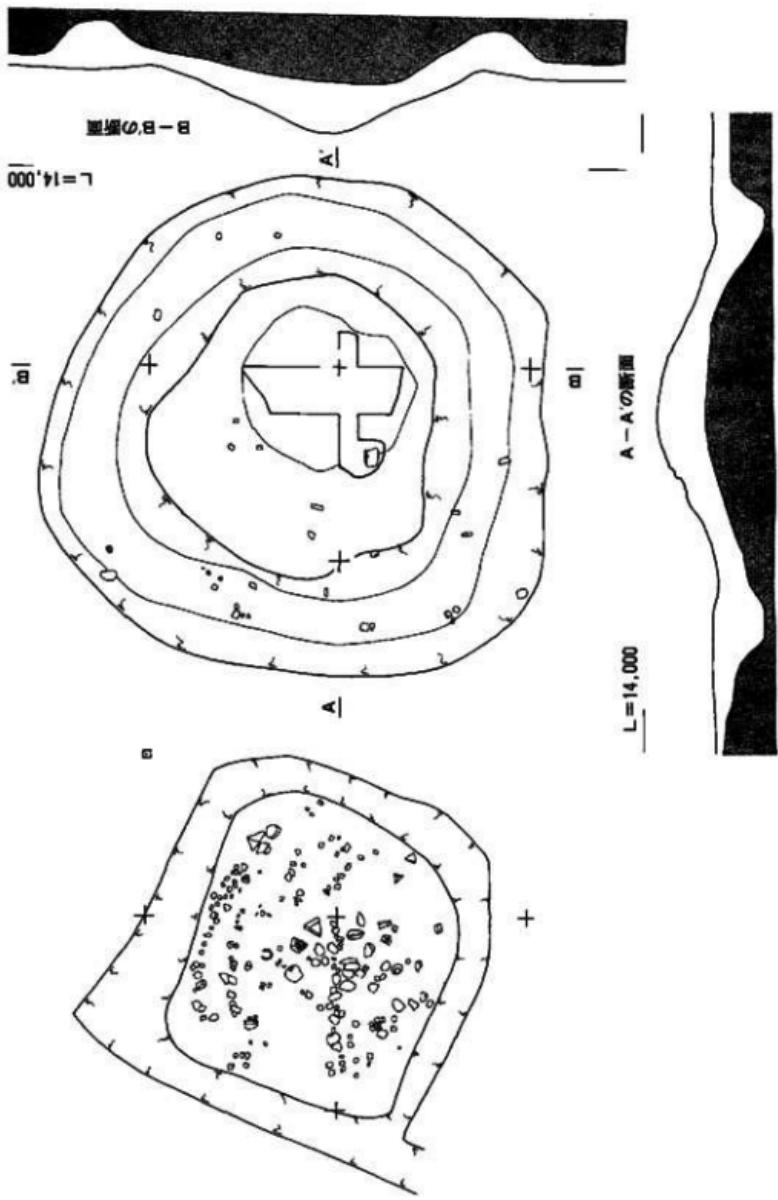
### 1. 円形周構造について

塚の頂点は海拔13m63cm、周構の底は12m48cmでその差は1m15cmをはかる。地表上に残存していた部分は高さ約60cmである。南北3m50cm、東西3m20cmの石積を残していた。最初は石組の石棺でも残存しているのではないかと考え4分割して掘りはじめた。

周辺の聞きこみでは「自分達が子どもよ頃は塚は背丈より高く墳頂には梅の木があって竹やぶになっていた。また周囲は腰までぐらいの溝がまわっていた。」という。遺物については個別に紹介するが溝の底から、磁器の盃や電灯線の絶縁体とし使用されていた碍子の管などが出土し、昭和20年頃までは溝がそのままあって、その後、徐々に埋められたことがわかる。

溝は深さが30~40cm、幅は40~60cmをはかり、ほぼ円形を示す。

遺構の性格を適格に示すことはできないが、中世の遺物特に瓦器が量的に多く、小さな凝灰岩の切石があったことから、小さな五輪の石塔でもあったのではないかと考えられる。感じとしては中世墳墓の標準となる地表上の遺物がなんらかの形で他に移されたものではないだろうか。



第3図 ウバの塙（上と下の図は重なる）（1/60大）

## 2. 遺物について

ウバの塚からの出土遺物は弥生時代から現代の生活廃棄物まで見られた。主たる遺物は中世の瓦質土器、火舎や擂鉢等が主体であった。以下若干の遺物を紹介する。

### 平瓦片〔第4図参照〕

平瓦は平原の瓦窯跡が近くにあり、また一山を越えて、南側には古保山庵寺がある。小片であるが5点ほど採集されている。表面は布目文様で、時にすり消されている。裏面は縄目叩文である。近くに寺のあった可能性がある。

図4は国分寺の昭和56年度調査分のもので、作業工程で指紋がついたもので、人差指、中指、薬指の第1関節から先がよく見える。

図1は平瓦で表は布目（平織）をすり消しておらず裏側は縄目叩文である。厚さ2.2cm。

図3は丸瓦で内側に布目のあとが残る。表は無文である。厚さ1.6cm。

### 火舎（図5）

獣脚の部分が破損してのこっている。蓮弁状のたてがみ4つと両端は耳の表現であろうか。まゆと眼はおだやかで、鼻の隆起部分は欠損している。口は開いており、中に球状に表現された歯が7本数えられる。

獣面の整形は型わくがあったと見られ、火舎の本体に凸状の作りだしをし、獣面の内側を凹にしてやわらかい土で貼りつけてある。

獣脚の出土例は下記のとおりである。

済々賀遺跡 熊本市黒髪2丁目22-1

曾畠貝塚<sup>注1</sup> 宇土市岩古曾町

註1 乙益重隆「肥後における獣脚の新例」昭33.11.15『九州考古学』5、6号

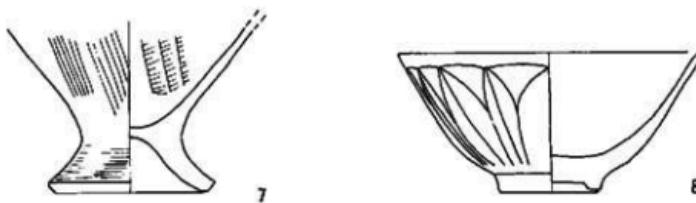
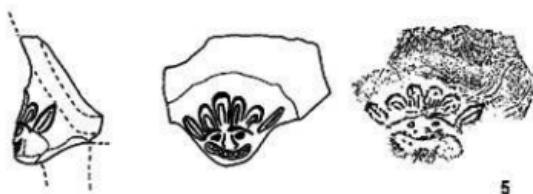
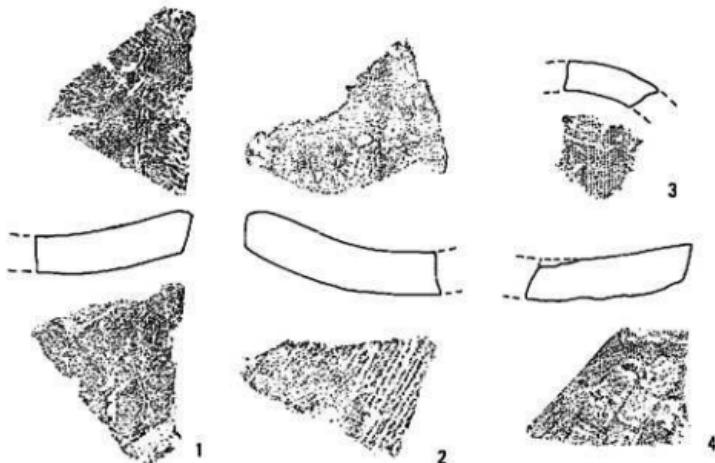
### 青磁碗（図8）

青磁碗は高さ7.2cm、口径16cmの完形品である。戦前に畑の耕作中に出土したとのことで付近（4トレンチ）を広げて掘ってみたが遺構としては何もつかめなかった。

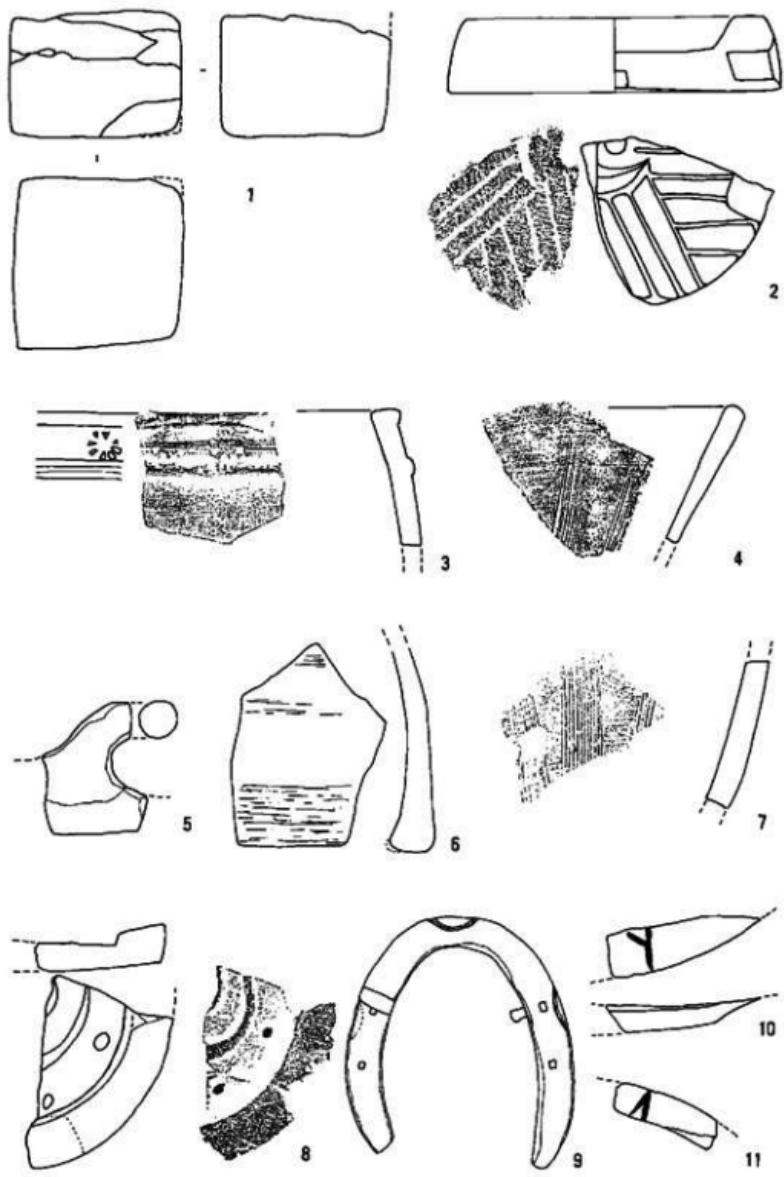
見込みには文様はないが、外側は大きな8花弁とその中に小さな8花弁を表し16花弁の復弁である。色はややあめ色を呈する釉薬や形態といい優品である。高台には釉薬がかかってなく高台底はへら切りである。（益賀氏所蔵品）

### 凝灰岩の切り石（地輪？）〔第5図参照〕

底の広さは18cm×18cmで、ほぼ方形を呈する。高さは現存高13cmで岩質が軟わらかいので多少は低くなっているであろうがほぼ旧状に近いものと考へてよい。付近に五輪塔をさがしたがあまり見あたらなかった。岡崎家の墓地の一角に五輪があったので参考のために図版におさめた。非常に小形の五輪塔になるがおそらく供養塔の一部ではないかと考える。（図1）



第4図 ウバの採取物実測図 (1/3大) 8は益賀氏蔵



第5図 ウバの塚遺物実測図 (1・2・10・11は1/6大、他は1/3大)

### 石臼（図2）

安山岩の石臼で、上臼の約6分の1が残存する。石臼の径は17.5cmで、下臼の芯棒にさしこむ中心の穴と上臼の穴から穀物がおちこむ「の」の字型の溝がある。石臼の目は西日本に共通の六等分割で目の数は5本と4本が残っており、相当に掘りへっている。周辺は厚くなつており8cmの厚さと中心には穀物を入れるために約4cmの凹みを作っている。中心の穴は深さが2.1cm、径2.4cmで、下臼とのすき間は中心部で0.4cmで外側はきちんととかみあわさる。また、図示するようにL字型の把手をさし込む穴がある。

穴の大きさは奥行2.9cm、幅3.4cm以上で欠損している。厚さがないところを見ると豆腐用の上臼であろうか。

### 土鍋の把手（図5）

把手の一部分しか残っていない。耳型の丸いつまみを作りだしている。把手の径は1.9cmである。色は褐色、焼は難でやわらかい。

### 摺鉢（図4、7）

数個体分の破片が出土している。明治以降のものから、中世の瓦器のまである。深さはわからないが6～8条ぐらいの凹線が底部から口辺部近くまで施される。他の遺跡の完形品の例で見ると口径30cm、深さ13.5cmである。立岡の集落がおそらく中世から続く古い集落であろう。この周辺に家があり生活の廃棄物として捨てられたものであろう。

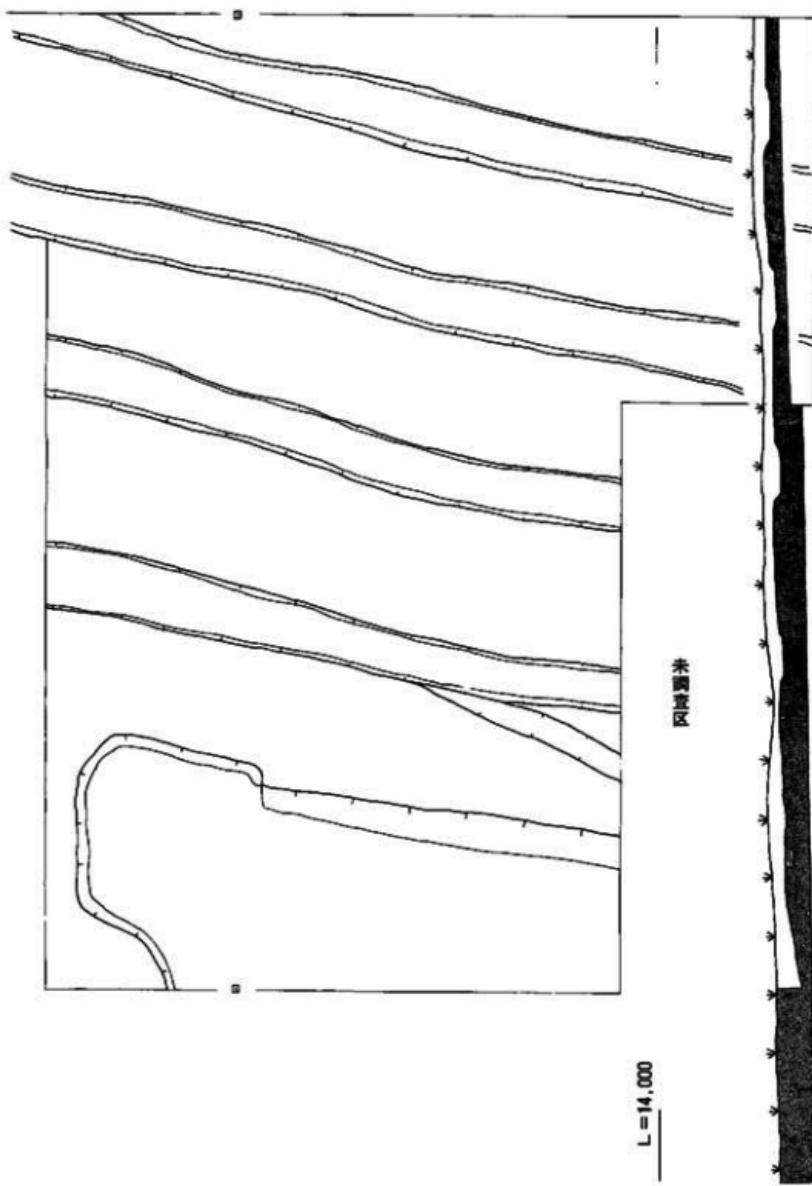
### 軒先 巴文丸瓦（図8）

3片を組ぐと3分の1位の丸瓦となって、巴文の尾部と珠文2個がみられる。丸瓦の径は約10cm、厚さ外側で2.0cm、裏側でさしこみ部分の剥落のあとが見られる。色は黒色で、宇土城（城山）出土の文様に似ている。（土製）

### 馬蹄と錨先（図9、10、11）

馬蹄は馬のひづめを保護するために使用するもので、全長は13.1cm、U字型の幅12.0cmである。角釘が右に2本、左に1本さびついて残っている。

錨先は破片となっておりソケット部分が見られる。全長16.1cm、巾4.8cm赤さびがきている。破損したので捨てられたものであろう。他の1片はV字型の溝を残す周辺部の破片で、全長11.5cmである。



第6図 ウバの坂南側 (1/60大)

### 第3章 その他の遺構について

#### 桑の植栽溝について〔第6図参照〕

塚の周辺に2m方眼を作成し、土手を残しながら広げて行った。

塚の南側は30m位で水田となるが黒い耕作土の落ち込みが観察された。幅は60cm~50cm、深いところで5cmをはかる皿状の溝が6本確認された。表土からの深さは約25cmで桑の木が植えてあったというから、その溝であろう。

溝中の遺物が少なく、特別な遺構とは認められなかった。

#### 第4トレンチについて

青磁碗が出土した畑境界付近にトレンチを入れたところ、中に炭化物がはいる円形の柱状の穴が発見された。更にトレンチを拡大したところの穴は栗の木を植えるために掘った穴で据立柱の建物の遺構でないことが判明した。

#### 潤野東側試掘トレンチ

畑境界の小さな溝の下がもとは1m幅ぐらいに掘られており、底部から須恵器片とクラウンカの湯呑み片が出土した。他にモミガラの残る芋穴と黒色に変色した古い芋穴が見られた。表面探集では須恵器、土師片が見られたがこれに伴う遺構は確認できなかった。

## 第4章 まとめ

明治以降はウバの塚としての伝承をもちながら、又戦後は潤野古墳群の1つ、二ツ枝古墳として認識されていた。今回の発掘によって古墳でないことが確認された。また、出土遺物として、古く弥生式土器、須恵器、古代寺院の瓦（布目瓦）、獸脚（火舍）、瓦器等、塚はまさに古代から現代までのゴミだめの感を程した。期待された古墳の残がいは出土せず、円形周構の遺構が確認された。これは、昔はなんらかの地上標示があったものであろうが、うばの塚の時代を決定すべき有力な資料はえられなかった。城南町尾塙の中世墳墓の形態に酷似することから、中世墳墓として位置付けるのが1番妥当であろう。

今回は出土を確認することはできなかったが、益賀氏の所有される、青磁碗の出土地も道路敷内であり、工事に伴ってなんらかの遺構が発見されるかも知れない。

# 図 版

图版1



上 弥生墓墳状土壤

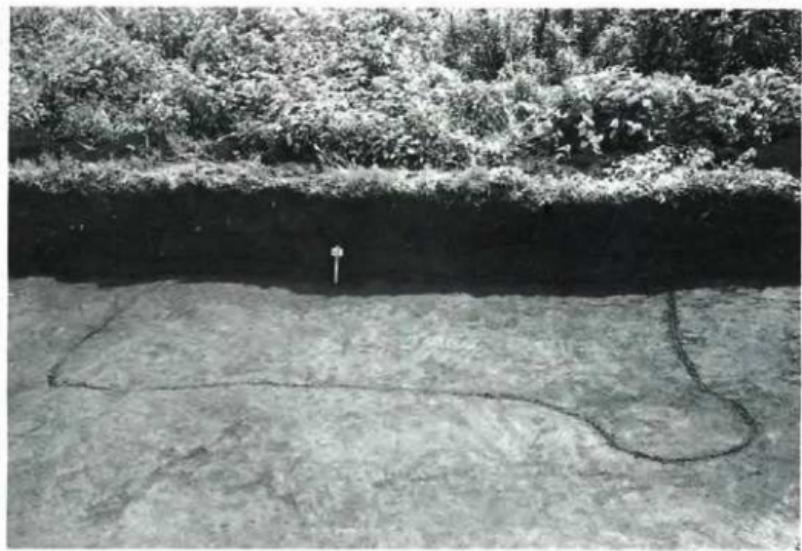
下 遺物出土状况

図版2



上 硬化面（上の住居内の道に続く） 下 C7区柱穴

図版3



住居状土壤

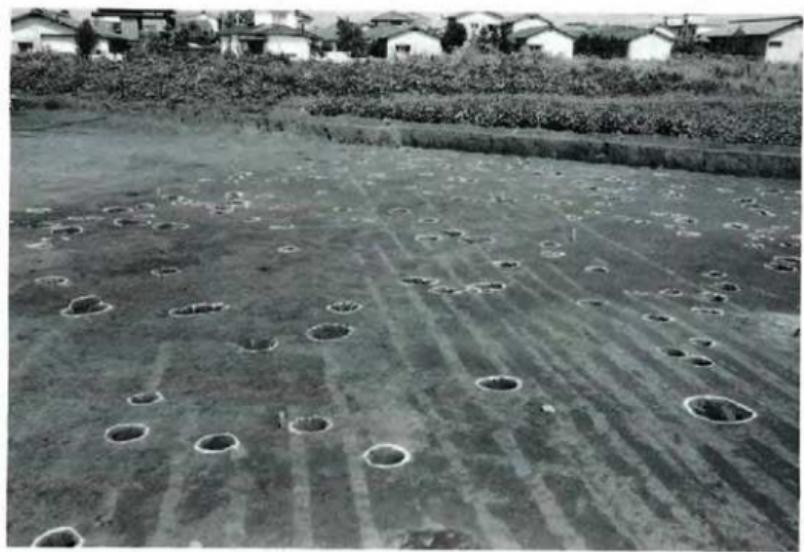
図版4



上 南西側より（第3号住居）

下 旧石器試掘トレンチ（E7区）

図版 5



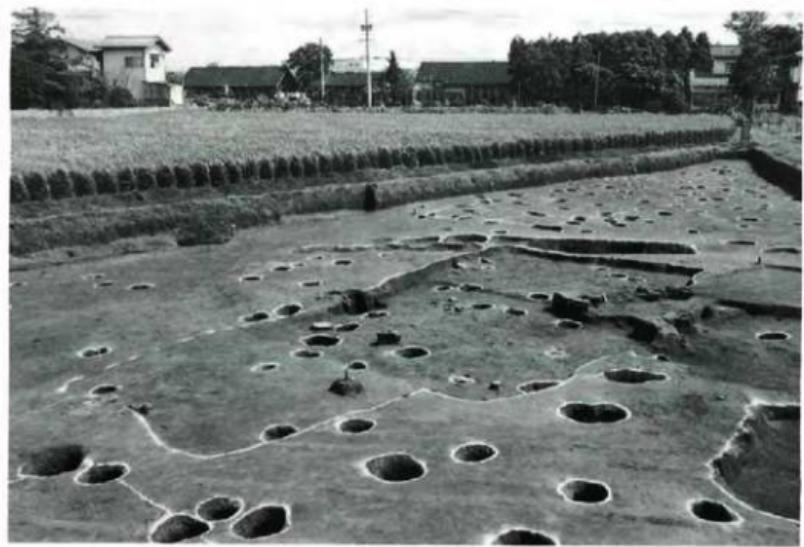
上 旧石器試掘トレンチ (E7区) 下 E8区柱穴

図版 6



上 D7区柱穴 下 E9区柱穴

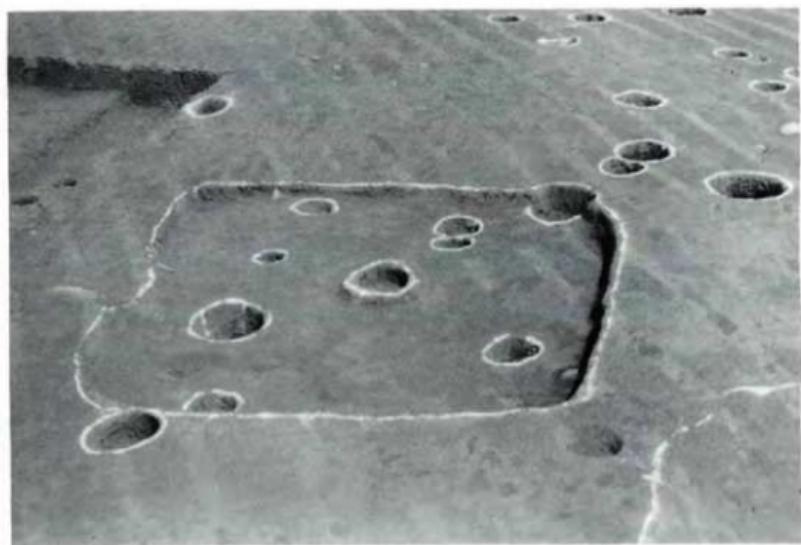
図版7



上 第9号住居跡

下 第9号住居と第13号住居跡遺構検出前

図版 8



上 第1~4号住居遺景 下 第1号住居跡

図版9



上 第5号住居跡内円形のたたき 下 かまど

図版10



上 第3号、第4号、第5号住居跡遺景 下 第6号住居跡の台石

図版11



紡錘車出土状況 6号住南側

图版12



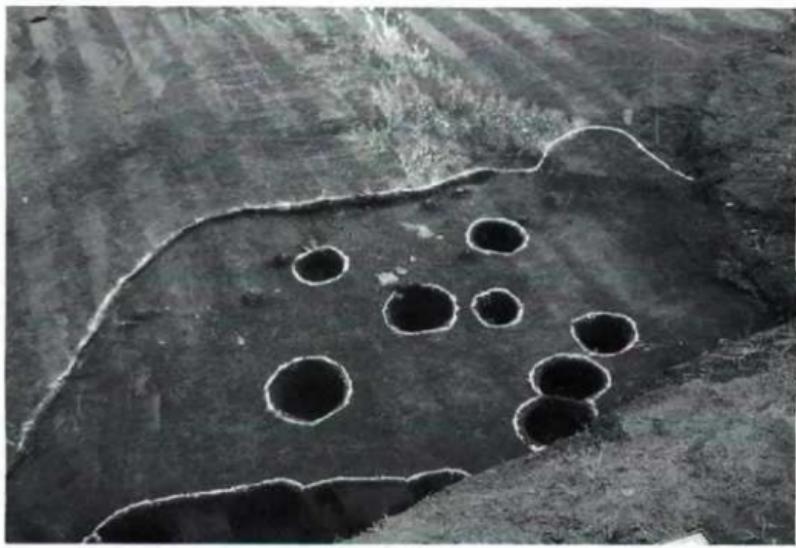
上 第6号住居跡 下 第7号住居



上 鐵鎌出土状況

下 鋤出土住居（第6号住居跡）

図版14



上 第7号住居 下 同住居内の柱穴



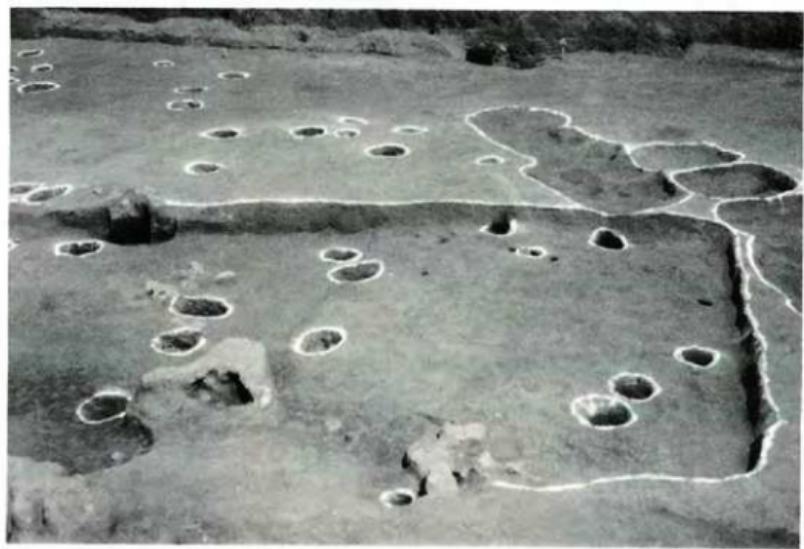
上 掘立柱遺景

下 掘立柱建物（左端中央第8号住居跡）

図版16



上 第9号かまど砂岩状石を使用 下 第9号住居跡



上 第14号かまど（中央） 下 第15号、第13号かまど

図版18



第14号かまど



上 第14号住居跡

下 第12号住居跡

図版20



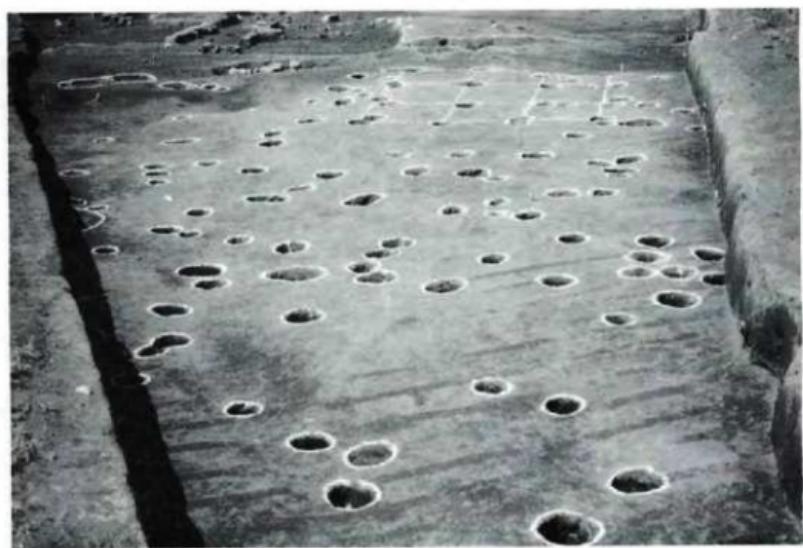
上 第13号、第14号、第15号かまど遺構確認 下 溝と縦柱建物

図版21



上 総柱建物 下 C13区柱穴

図版22



上 発掘風景 下 C14区柱穴



上 第4号かまど 下 第5号かまど

図版24

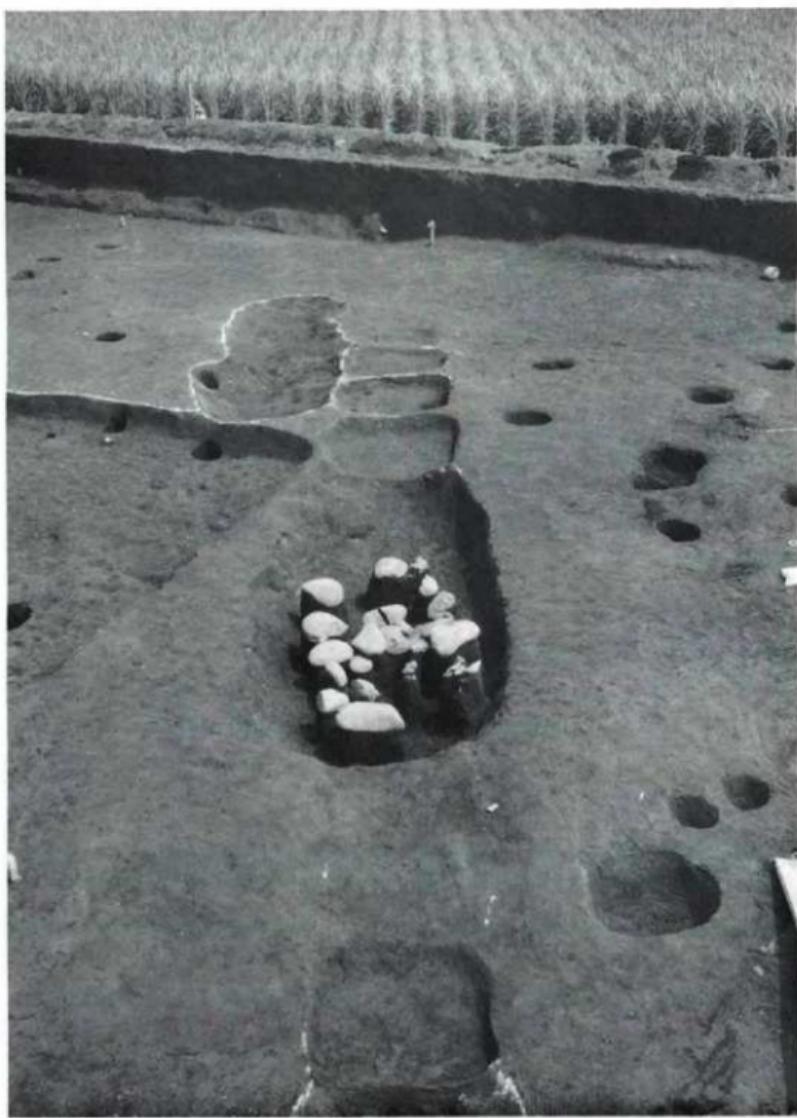


D12区付近（西側より）

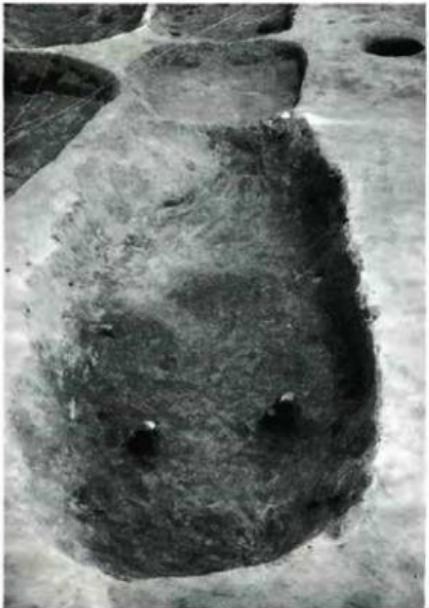


上 C13区柱穴 下 造標確認作業

図版26



土壙内の石組



上 土塊內石組除去遠景  
下 近景

図版28



上 土壌と総柱柱穴

下 土壌底の遺物

図版 1



上 清掃前のようにす

下 清掃後のウバの塚

図版2



上・下 ウバの家 南側より

図版 3



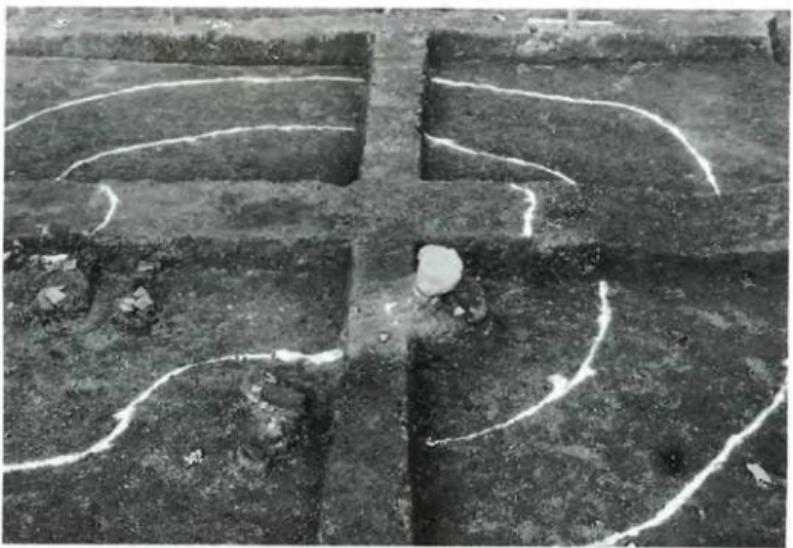
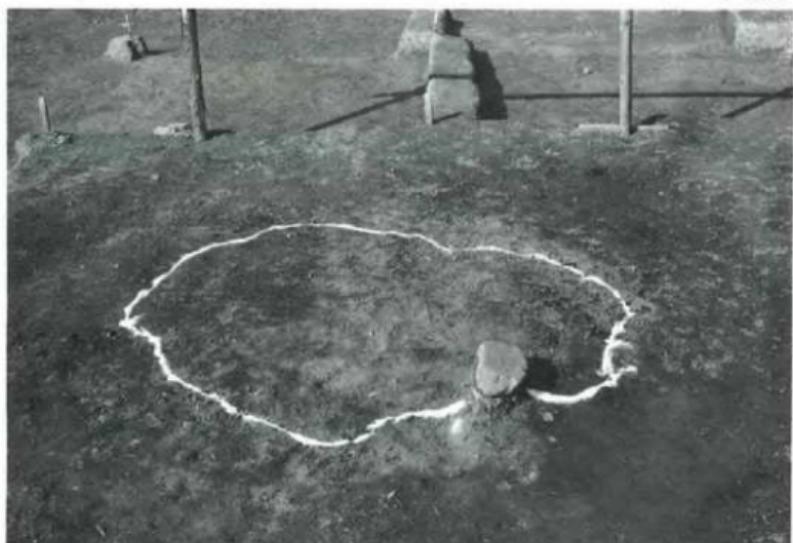
上 ウバの塚 下 石臼の出土状況

図版4



上 ウバの塚西側 下 ウバの塚東側

図版5



上 ウバの塚封土除去後 下 溝の確認

図版 6



上 溝兜掘西側より 下 東側より



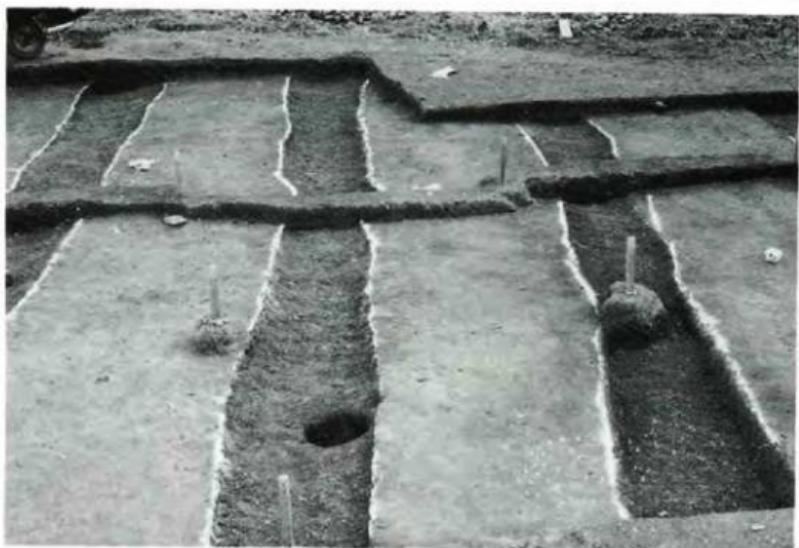
上・下 封土表面の遺物の散布状況

図版 8



上 火舍部分 下 獣脚出土状況

図版9



溝状造構完掘（上南側より、下西側より）

図版10



溝状造構確認（上南側より、下西側より）

図版11



2 トレンチ北側

図版12



上 3トレンチ南側

下 3トレンチ北側の土壤

図版13



4 トレンチの遺構（右列は植栽のあと）

図版14



P118地点トレンチ



上 調査地遠景（北より）

下 岡崎家墓地の五輪之塔

図版16



上 指崎古墳 下 家型石棺



ウロゴノ遺跡試掘トレンチ（柱穴か）

図版18



ウロゴノ遺跡試掘トレンチ（上 P132地点 下 P133地点）

熊本県文化財報告書 第84集

新南部・洞野遺跡

—国道3号熊本北バイパス及び松橋  
バイパスに伴う埋蔵文化財発掘報告—

昭和61年3月31日

発行 熊本県教育委員会  
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 下田印刷 熊本支店  
熊本市南熊本3丁目1-3

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 84 集を底本として作成しました。  
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用  
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図  
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用  
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：新南部 潤野遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日